けたまへ。爾の時に佛・観世音菩薩に告げたまはく、當に此の無盡意菩薩及び四衆・天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等を愍むが故に是の瓔珞を受くべし。即時に観世音菩薩、諸の四衆及び天・龍・人非人等を愍んで是の瓔珞を受け、分って二分と作して一分は釋迦牟尼佛に奉り、一分は多寶佛塔に奉る。無盡意、観世音菩薩は是の如き自在神力あって娑婆世界に遊ぶ。

爾の時に無盡意菩薩、偈を以て問ふて曰さく、

世尊は妙相具はりたまへり　我今重ねて彼を問ひたてまつる　佛子何の因縁あってか　名けて観世音とする

妙相を具足したまへる尊　偈をもって無盡意に答へたまはく　汝観音の行を聽け　善く諸の方所に應ずる

弘誓の深きこと海の如し　劫を歴とも思議せじ　多千億の佛に侍へて　大清淨の願を發せり　我汝が爲に

略して說かん　名を聞き及び身を見　心に念じて空しく過ぎざれば　能く諸有の苦を滅す　假使害の意を興して　大なる火坑に推し落されんに　彼の觀音の力を念ぜば　火坑變じて池と成らん　或は巨海に漂流して　龍魚諸鬼の難あらんに　彼の觀音の力を念ぜば　波浪も沒すること能はじ　或は須彌の峯に在つて　人に推し墮されんに　彼の觀音の力を念ぜば　日の如くにして虛空に住せん　或は惡人に逐はれて　金剛山より墮落せんに　彼の觀音の力を念ぜば　一毛をも損すること能はじ　或は怨賊の繞んで　各刀を執つて害を加ふるに値はんに　彼の觀音の力を念ぜば　咸く即ち慈心を起さん　或は王難の苦に遭ふて　刑せらるるに臨んで壽終らんと欲せんに　彼の觀音の力を念ぜば　刀尋いで段々に壞れなん　或は枷鎖に囚禁せら

れて　手足に杻械を被らんに　彼の観音の力を念ぜば　釋然として解脱することを得ん　呪詛諸の毒藥に身を害せんと欲せられん者　彼の観音の力を念ぜば　還って本人に著きなん　或は惡羅刹　毒龍諸鬼等に遭はんに　彼の観音の力を念ぜば　時に悉く敢て害せじ　若しは惡獸圍繞して　利き牙爪の怖るべきに彼の観音の力を念ぜば　疾く無邊の方に走りなん　蚖

蛇及び蝮蠍　氣毒煙火の燃ゆるがごとくならんに　彼の観音の力を念ぜば　聲に尋いで自ら回り去らん　雲雷鼓掣電し　雹を降らし大なる雨を澍がんに　彼の観音の力を念ぜば　時に應じて消散することを得ん　衆生困厄を被って　無量の苦身を逼めんに　観音妙智の力　能く世間の苦を救ふ　神通力を具足し　廣く智の方便を修して　十方の諸の國土に　刹として身を現

ぜざることなし　種種の諸の惡趣　地獄鬼畜生　生老病死の苦　以て漸く悉く滅せしむ　眞觀淸淨觀　廣大智慧觀　悲觀及び慈觀あり　常に願ひ常に瞻仰すべし　無垢淸淨の光あつて　慧日諸の闇を破し　能く災の風火を伏して　普く明かに世間を照らす　悲體の戒雷震のごとく　慈意の妙大雲のごとく　甘露の法雨を澍ぎ　煩惱の燄を滅除す　諍訟して官處を經　軍陣の中に怖畏せんに　彼の觀音の力を念ぜば　衆の怨悉く退散せん　妙音觀世音　梵音海潮音　勝彼世間音あり　是の故に須らく常に念ずべし　念念に疑を生ずることなかれ　觀世音淨聖は　苦惱死厄に於て　能く爲に依怙と作れり　一切の功德を具して　慈眼をもつて衆生を視る　福聚の海無量なり　是の故に頂禮すべし

爾の時に持地菩薩、即ち座より起って、前んで佛に白して言さく、世尊、若し衆生あって是の觀世音菩薩品の自在の業・普門示現の神通力を聞かん者は、當に知るべし、是の人の功德少からじ。佛、是の普門品を說きたまふ時、衆中の八萬四千の衆生、皆無等等の阿耨多羅三藐三菩提の心を發しき。

妙法蓮華經陀羅尼品第二十六

爾の時に藥王菩薩、即ち座より起って偏に右の肩を袒にし、合掌し佛に向ひたてまつりて、佛に白して言さく、世尊、若し善男子・善女人の能く法華經を受持することあらん者、若しは讀誦通利し若しは經卷を書寫せんに、幾所の福をか得ん。佛、藥王に告げたまはく、若し善男子・善女人あって、八百萬億那由佗恒河沙等の諸佛を供養せん。汝が意に於て云何、其の所得の福寧ろ多しと爲んや不

や。甚だ多し、世尊。佛の言はく、若し善男子・善女人能く是の經に於て、乃至一四句偈を受持し、讀誦し解義し說の如く修行せん、功德甚だ多し。爾の時に藥王菩薩、佛に白して言さく、世尊、我今當に說法者に陀羅尼呪を與へて、以て之を守護しべし。卽ち呪を說いて曰さく、

安爾一 曼爾二 摩禰三 摩摩禰四 旨隷五 遮棃第六 賒咩羊鳴音七 賒履罔雉反 多瑋八 羶輪千反帝九 目帝十 目多履十一 沙履十二 阿瑋沙履十三 桑履十四 沙履十五 叉裔十六 阿叉裔十七 阿耆膩十八 羶帝十九 賒履二十 陀羅尼二十一 阿盧伽婆娑蘇柰反 簸蔗毗叉膩二十二 禰毗剃二十三 阿便哆都餓反 邏禰履剃二十四 阿亶哆波 隷輸地途賣反二十五 歐究隷二十六 牟究隷二十七 阿羅隷二十八 波羅隷二十九 首迦差初几反三十 阿三磨三履三十一 佛駄毗吉利秩帝三十二 達磨波利差猜離反 帝三十三 僧伽涅瞿沙禰三十四 婆舍婆舍輸地三十五 曼哆邏三十六 曼哆邏叉夜多三十七 郵樓哆郵樓哆三十八 憍舍略盧庶反三十九 惡叉邏四十 惡叉冶多冶四十一 阿婆盧四十二 阿摩若荏蔗反 那多夜四十三

世尊、是の陀羅尼神呪は六十二億恒河沙等の諸佛の所說なり。若し此の法師を侵毀することあらん者は、則ち爲れ是の諸佛を侵毀し已れるなり。時に釋迦牟尼佛、藥王菩薩を讃めて言はく、善哉善哉、藥王、汝此の法師を愍念し擁護するが故に是の陀羅尼を說く。諸の衆生に於て饒益する所多からん。

爾の時に勇施菩薩、佛に白して言さく、世尊、我亦法華經

を讀誦し受持せん者を擁護せんが爲に、陀羅尼を說かん。若し此の法師、是の陀羅尼を得ば、若しは夜叉、若しは羅刹、若しは富單那、若しは吉蔗、若しは鳩槃荼、若しは餓鬼等、其の短を伺ひ求むとも能く便を得ることなけん。卽ち佛前に於て呪を說いて曰さく、

痤（誓螺反）隷一。摩訶痤隷二。郁枳三。目枳四。阿隷五。阿羅婆第六。涅隷第七。涅隷多婆第八。伊緻（豬履反）柅九。韋緻柅十。旨緻柅十一。涅隷墀柅十二。涅

犁墀婆底三十。

世尊、是の陀羅尼神呪は恒河沙等の諸佛の所說なり、亦皆隨喜したまふ。若し此の法師を侵毀することあらん者は、則ち爲れ是の諸佛を侵毀し已れるなり。爾の時に毗沙門天王護世者、佛に白して言さく、世尊、我亦衆生を愍念し、此の法師を擁護せんが爲の故に、是の陀羅尼を說かん。卽ち呪を說いて曰さく、

阿梨一。那梨二。㝹那梨三。阿那盧四。那履五。拘那履六

世尊、是の神呪を以て法師を擁護せん。我亦自ら當に是の經を持たん者を擁護して、百由旬の內に諸の衰患なからしむべし。

爾の時に持國天王、此の會中に在って、千萬億那由佗の乾闥婆衆の恭敬し圍繞せると、前んで佛所に詣で、合掌し佛に白して言さく、世尊、我亦陀羅尼神呪を以て、法華經

を持たん者を擁護せん。即ち呪を說いて曰さく、
阿伽禰一。伽禰二。瞿利三。乾陀利四。旃陀利五。摩蹬耆六。常求利七。
浮樓莎柅八。頞底九。
世尊、是の陀羅尼神呪は四十二億の諸佛の所說なり。若し此の法師を侵毀することあらん者は、則ち爲れ是の諸佛を侵毀し已れるなり。
爾の時に羅刹女等あり、一を藍婆と名け、二を毗藍婆と名け、三を曲齒と名け、四を華齒と名け、五を黑齒と名け、六を多髮と名け、七を無厭足と名け、八を持瓔珞と名け、九を皐諦と名け、十を奪一切衆生精氣と名く。是の十羅刹女、鬼子母幷に其の子及び眷屬と倶に佛所に詣で、同聲に佛に白して言さく、世尊、我等亦法華經を讀誦し受持せん者を擁護して、其の衰患を除かんと欲す。若し法師の短を伺ひ求むる者ありとも、便を得ざらしめん。即ち佛前

に於て呪を說いて曰さく、
伊提履一。伊提泯二。伊提履三。阿提履四。伊提履五。泥履六。泥履七。
泥履八。泥履九。泥履十。樓醯十一。樓醯十二。樓醯十三。樓醯十四。多醯十五。多醯十六。
多醯十七。兜醯十八。㝹醯。
寧ろ我か頭の上に上るとも法師を惱すことなかれ。若しは夜叉、若しは羅刹、若しは餓鬼、若しは富單那、若しは吉蔗、若しは毗陀羅、若しは揵駄、若しは烏摩勒伽、若しは

阿跋摩羅、若しは夜叉吉蔗、若しは人吉蔗、若しは熱病せしむること若しは一日、若しは二日、若しは三日、若しは四日乃至七日、若しは常に熱病せしめん、若しは男形、若しは女形、若しは童男形、若しは童女形、乃至夢の中にも亦復惱すことなかれ。卽ち佛前に於て偈を說いて言さく、

若し我が呪に順ぜずして　說法者を惱亂せば　頭破れて七分に作ること　阿梨樹の枝の如くならん　父母を殺

する罪の如く　亦油を壓す殃　斗秤をもって人を欺誑し　調達が破僧罪の如く　此の法師を犯さん者は　當に是の如き殃を獲べし

諸の羅刹女、此の偈を説き已って、佛に白して言さく、世尊、我等亦當に身自ら是の經を受持し讀誦し修行せん者を擁護して、安穩なることを得、諸の衰患を離れ、衆の毒藥を消せしむべし。　佛、諸の羅刹女に告げたまはく、善哉善哉、汝等但能く法華の名を受持せん者を擁護せんすら、福量るべからず。何に況んや、具足して受持し、經卷に華・香・瓔珞・抹香・塗香・燒香・旛蓋・伎樂を供養し、種種の燈・蘇燈・油燈・諸の香油燈・蘇摩那華油燈・瞻蔔華油燈・婆師迦華油燈・優鉢羅華油燈を然し、是の如き等の百千種をもって供養せん者を擁護せんをや。皐諦、汝等及び眷屬應當に是の如き法師を擁護すべし。　此の陀羅尼品を説き

たまふ時、六萬八千人無生法忍を得たり。

妙法蓮華經妙莊嚴王本事品第二十七

爾の時に佛、諸の大衆に告げたまはく、乃往古世に、無量無邊不可思議阿僧祇劫を過ぎて、佛いましき、雲雷音宿王華智・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と名けたてまつる。國を光明莊嚴と名け、劫を喜見と名く。彼の佛の法の中に王あり、妙莊嚴と名く。其の王の夫人名を淨德といふ。二子あり、一を淨藏と名け二を淨眼と名く。是の二子大神力・福德・智慧あつて、久しく菩薩所行の道を修せり。所謂檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毗梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜・方便波羅蜜・慈・悲・喜・捨・乃至三十七品の助道の法、皆悉く明了に通達せり。又菩薩の淨三昧・日星宿三昧・淨光三昧・淨色三昧・淨照明三昧・長莊嚴三昧・大威德藏三昧を得、此の三昧に於て亦悉く通達

せり。爾の時に彼の佛、妙莊嚴王を引導せんと欲し、及び衆生を愍念したまふが故に、此の法華經を說きたまふ。時に淨藏・淨眼の二子其の母の所に到つて、十指爪掌を合せて白して言さく、願はくは母、雲雷音宿王華智佛の所に往詣したまへ。我等亦當に侍從し親近し供養し禮拜すべし。所以は何ん、此の佛一切の天人衆の中に於て、法華經を說きたまふ、宜しく聽受すべし。母、子に告げて

言はく、汝が父外道を信受して、深く婆羅門の法に著せり。汝等往いて父に白して與して倶に去らしむべし。淨藏・淨眼、十指爪掌を合せて母に白さく、我等は是れ法王の子なり、而るに此の邪見の家に生れたり。母、子に告げて言はく、汝等當に汝が父を憂念して爲に神變を現ずべし。若し見ることを得ば心必ず淸淨ならん。或は我等が佛所に往至することを聽されん。是に二子其の父を念ふが

故に、虛空に踊在すること高さ七多羅樹にして、種種の神變を現ず。虛空の中に於て行・往・坐・臥し、身の上より水を出し、身の下より火を出し、身の下より水を出し、身の上より火を出し、或は大身を現じて虛空の中に滿ち、而も復小を現じ、小にして復大を現じ、空中に於て滅し、忽然として地に在り、地に入ること水の如く、水を履むこと地の如し。是の如き等の種種の神變を現じて、其の父の王をして心

淨く信解せしむ。時に父、子の神力是の如くなるを見て、心大に歡喜し未曾有なることを得、合掌して子に向って言はく、汝等が師は爲めて是れ誰ぞ、誰の弟子ぞ。二子白して言さく、大王、彼の雲雷音宿王華智佛、今七寶菩提樹下の法座の上に在して坐したまへり。一切世間の天人衆の中に於て、廣く法華經を說きたまふ。是れ我等が師なり、我は是れ弟子なり。父、子に語って言はく、我今亦汝等が師

を見たてまつらんと欲す、共倶に往く可し。是に二子空中より下りて其の母の所に到つて、合掌して母に白さく、

父の王今已に信解して、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すに堪任せり。我等父の爲に已に佛事を作しつ。願はくは母、彼の佛の所に於て、出家し修道せんことを聽されよ

爾の時に二子、重ねて其の意を宣べんと欲して、偈を以て母に白さく、

願はくは母我等　出家して沙門とならんことを放したまへ　諸佛には甚だ値ひたてまつること難し　我等佛に隨ひたてまつりて學せん　優曇波羅の如く　佛に値ひたてまつること復是れよりも難し　諸難を脫るること亦難し　願はくは我が出家を聽したまへ

母即ち告げて言はく、汝が出家を聽す。所以は何ん、佛には値ひたてまつること難きが故に。是に二子、父母に白し

て言さく、善哉父母、願はくは時に雲雷音宿王華智佛の所に往詣して、親覲し供養したまへ。所以は何ん、佛には値ひたてまつること得難し、優曇波羅華の如く、又一眼の龜の浮木の孔に値へるが如し。而るに我等宿福深厚にして佛法に生れ値へり。是の故に父母、當に我等を聽して出家することを得せしめたまふべし。所以は何ん、諸佛には値ひたてまつり難し、時にも亦遇ふこと難し。彼の時に妙莊嚴王の後宮の八萬四千人、皆悉く是の法華經を受持するに堪任しぬ。淨眼菩薩は法華三昧に於て久しく已に通達せり。淨藏菩薩は已に無量百千萬億劫に於て、離諸惡趣三昧に通達せり、一切衆生をして諸の惡趣を離れしめんと欲するが故に。其の王の夫人は諸佛集三昧を得て能く、諸佛の秘密の藏を知れり。二子是の如く方便力を以て善く其の父を化して、心に佛法を信解し好樂せし

む。是に妙莊嚴王は群臣眷屬と倶に、淨德夫人は後宮の采女眷屬と倶に、其の王の二子は四萬二千人と倶に、一時に共に佛所に詣づ。到り已つて頭面に足を禮し、佛を繞ること三帀して却つて一面に住す。

爾の時に彼の佛、王の爲に法を說いて示教利喜したまふ、王大に歡悅す。爾の時に妙莊嚴王及び其の夫人、頸の眞珠瓔珞の價直百千なるを解いて、以て佛の上に散ず。虛

空の中に於て化して四柱の寶臺と成る。臺の中に大寶の牀あつて、百千萬の天衣を敷けり。其の上に佛いまして結跏趺坐して大光明を放ちたまふ。爾の時に妙莊嚴王是の念を作さく、佛身は希有にして端嚴殊特なり、第一微妙の色を成就したまへり。時に雲雷音宿王華智佛、四衆に告げて言はく、汝等、是の妙莊嚴王の我が前に於て合掌して立てるを見るや不や。此の王我が法の中に於て比

丘と作り、助佛道の法を精勤修習して、當に作佛することを得べし、娑羅樹王と號けん。國を大光と名け、劫を大高王と名けん。其の娑羅樹王佛は、無量の菩薩衆及び無量の聲聞あつて、其の國平正ならん。功徳是の如し。其の王、即時に國を以て弟に付して王と夫人・二子幷に諸の眷屬と、佛法の中に於て出家し修道しき。王出家し已つて、八萬四千歳に於て、常に勤め精進して妙法華經を修行す。是れを過ぎて已後、一切淨功徳莊嚴三昧を得つ。即ち虚空に昇ること高さ七多羅樹にして、佛に白して言さく、世尊、此の我が二子已に佛事を作しつ、神通變化を以て、我が邪心を轉じて佛法の中に安住することを得、世尊を見たてまつることを得せしむ。此の二子は是れ我が善知識なり。宿世の善根を發起して、我を饒益せんと欲するを爲ての故に、我が家に來生せり。

爾の時に雲雷音宿王華智佛、妙莊嚴王に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所言の如し。若し善男子・善女人、善根を植ゑたるが故に世世に善知識を得。其の善智識は能く佛事を作し、示教利喜して阿耨多羅三藐三菩提に入らしむ。大王當に知るべし、善知識は是れ大因縁なり。所謂化導して、佛を見阿耨多羅三藐三菩提の心を發すことを得せしむ。大王、汝此の二子を見るや不や。此の二子は已に曾て六十五百千萬億那由陀恒河沙の諸佛を供養し、親近し恭敬して、諸佛の所に於て法華經を受持し、邪見の衆生を愍念して正見に住せしむ。妙莊嚴王即ち虚空の中より下りて、佛に白して言さく、世尊、如來は甚だ希有なり。功德・智慧を以ての故に、頂上の肉髻光明顯照す。其の眼長廣にして紺青の色なり。眉間の毫相白きこと珂月の如し、齒白く齊密にして常に光明あり。

唇の色赤好にして頻婆果の如し。爾の時に妙莊嚴王、佛の是の如き等の無量百千萬億の功德を讃歎し已つて、如來の前に於て一心に合掌して、復佛に白して言さく、世尊、未曾有也。如來の法は不可思議微妙の功德を具足し成就したまへり。敎戒の所行安穩快善なり。我今日より復自ら心行に隨はじ、邪見・憍慢・瞋恚・諸惡の心を生ぜじ。是の語を說き已つて、佛を禮して出でにき。佛、大

衆に告げたまはく、意に於て云何、妙莊嚴王は豈に異人ならんや、今の華德菩薩是れなり。其の淨德夫人は今の佛前に光をもつて照したまふ莊嚴相の菩薩是れなり。妙莊嚴王及び諸の眷屬を哀愍せんが故に、彼の中に於て生ぜり。其の二子は今の藥王菩薩・藥上菩薩是れなり。是の藥王・藥上菩薩は此の如き諸の大功德を成就し、已に無量百千萬億の諸佛の所に於て衆の德本を植ゑ、

不可思議の諸善功德を成就せり。若し人あつて是の二菩薩の名字を識らん者は、一切世間の諸天人民亦禮拜すべし。佛是の妙莊嚴王本事品を說きたまふ時、八萬四千人遠塵離垢して、諸法の中に於て法眼淨を得たり。

妙法蓮華經普賢菩薩勸發品第二十八

爾の時に普賢菩薩、自在神通力・威德名聞を以て、大菩薩の無量無邊不可稱數なると東方より來る。所經の諸國普く皆震動し、寶蓮華を雨らし、無量百千萬億の種種の伎樂を作す。又無數の諸天・龍・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等の大衆の圍繞せると、各威德・神通の力を現じて、娑婆世界の耆闍崛山の中に到つて、頭面に釋迦牟尼佛を禮し、右に繞ること七帀して、佛に白して言さく、世尊、我寶威德上王佛の國に於て、遙かに此の娑婆世界に法華經を說きたまふを聞いて、無量無邊百

千萬億の諸の菩薩衆と共に來って聽受す。唯願はくは世尊、當に爲に之を說きたまふべし。若し善男子・善女人、如來の滅後に於て云何してか能く是の法華經を得ん。佛、普賢菩薩に告げたまはく、若し善男子・善女人、四法を成就せば如來の滅後に於て當に是の法華經を得べし。一には諸佛に護念せらるゝことを爲、二には諸の德本を植ゑ、三には正定聚に入り、四には一切衆生を救ふの心を發せるなり。善男子・善女人、是の如く四法を成就せば如來の滅後に於て必ず是の經を得ん。爾の時に普賢菩薩、佛に白して言さく、世尊、後の五百歲濁惡世の中に於て、其れ是の經典を受持することあらん者は、我當に守護して其の衰患を除き安穩なることを得せしめ、伺ひ求むるに其の便を得る者なからしむべし。若しは魔、若しは魔子、若しは魔女、若しは魔民、若しは魔に著せられたる者、若

しは夜叉、若しは羅刹、若しは鳩槃茶、若しは毗舍闍、若しは吉蔗、若しは富單那、若しは韋陀羅等の諸の人を惱す者、皆便を得ざらん。是の人若しは行き若しは立つて此の經を讀誦せば、我爾の時に六牙の白象王に乘つて、大菩薩衆と倶に其の所に詣つて、自ら身を現じて供養し守護して其の心を安慰せん。亦法華經を供養せんが爲の故なり。是の人若しは坐して此の經を思惟せば、爾の時に我復白象王に乘つて其の人の前に現ぜん。其の人若し法華經に於て一句・一偈をも忘失する所有らば、我當に之を敎へて與共に讀誦し、還つて通利せしむべし。爾の時に法華經を受持し讀誦せん者、我が身を見ることを得て、甚だ大に歡喜して轉た復精進せん。我を見るを以ての故に即ち三昧及び陀羅尼を得ん。名けて旋陀羅尼・百千萬億旋陀羅尼・法音方便陀羅尼とす。是の如き等の陀羅尼を得

ん。世尊、若し後の世の後の五百歳濁惡世の中に、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の求索せん者、受持せん者、讀誦せん者、書寫せん者是の法華經を修習せんと欲せば、三七日の中に於て一心に精進すべし。三七日を滿じ已らんに、我當に六牙の白象に乘つて、無量の菩薩の而も自ら圍繞せると、一切衆生の見んと憙ふ所の身を以て其の人の前に現じて、爲に法を説いて示教利喜すべし。亦復其れに陀羅尼呪を與へん。是の陀羅尼を得るが故に非人の能く破壞する者あること無けん。亦女人に惑亂せられじ。我が身亦自ら常に是の人を護らん。唯願はくは世尊、我が此の陀羅尼を説くことを聽したまへ。即ち佛前に於て呪を説いて曰さく、

阿檀地途賣反一 檀陀婆地二 檀陀婆帝三 檀陀鳩賒隸四 檀陀脩陀隸五 脩陀隸六。脩陀羅婆底七。佛駄波羶禰八 薩婆陀羅尼・阿婆多尼九

薩婆婆沙・阿婆多尼十 脩阿婆多尼十一 僧伽婆履叉尼十二 僧伽涅・伽陀尼十三 阿僧祇十四 僧伽波伽地十五 帝隷阿惰僧伽兜略盧遮反 阿羅帝・波羅帝十六 薩婆僧伽・三摩地・伽蘭地十七 薩婆達磨・脩波利刹帝十八 薩婆薩埵樓駄憍舍略・阿㝹伽地十九 辛阿毗吉利地帝二十

世尊、若し菩薩あつて此の陀羅尼を聞くことを得ん者は、當に知るべし、普賢神通の力なり。若し法華經の閻浮提に行ぜんを受持することあらん者は、此の念を作すべし、皆是れ普賢威神の力なりと。若し受持し讀誦し正憶念し、其の義趣を解し說の如く修行することあらん、當に知るべし、是の人は普賢の行を行ずるなり。無量無邊の諸佛の所に於て深く善根を種ゑたるなり。諸の如來の手をもつて、其の頭を摩でたまふを爲ん。若し但書寫せんは、是の人命終して當に忉利天上に生ずべし。是の時に八萬四千の天女、衆の伎樂を作して來つて之を迎へん。

其の人即ち七寶の冠を著て、采女の中に於て娯樂快樂せん。何に況んや受持し讀誦し正憶念し、其の義趣を解し說の如く修行せんをや。若し人あつて受持し讀誦し其の義趣を解せん。是の人命終せば、千佛の手を授けて、恐怖せず惡趣に墮ちざらしめたまふことを爲、即ち兜率天上の彌勒菩薩の所に往かん。彌勒菩薩は三十二相あつて、大菩薩衆に共に圍繞せらる。百千萬億の天女眷屬あつて、中に於て生ぜん。是の如き等の功德利益あらん。是の故に智者、應當に一心に自ら書き若しは人をしても書かしめ、受持し讀誦し正憶念し、說の如く修行すべし。世尊、我今神通力を以ての故に是の經を守護して、如來の滅後に於て閻浮提の內に、廣く流布せしめて斷絕せざらしめん。

爾の時に釋迦牟尼佛讃めて言はく、善哉善哉、普賢、汝能く是の經を護助して、多所の衆生をして安樂し利益せ

しめん。汝已に不可思議の功德・深大の慈悲を成就せり。久遠より來阿耨多羅三藐三菩提の意を發して、能く是の神通の願を作して是の經を守護す。我當に神通力を以て能く、普賢菩薩の名を受持せん者を守護すべし。普賢、若し是の法華經を受持し讀誦し正憶念し修習し書寫することあらん者は、當に知るべし、是の人は則ち釋迦牟尼佛を見るなり、佛口より此の經典を聞くが如し當に

知るべし、是の人は釋迦牟尼佛を供養するなり。當に知るべし、是の人は佛、善哉と讃む。當に知るべし、是の人は釋迦牟尼佛の手をもつて、其の頭を摩するを爲ん。當に知るべし、是の人は釋迦牟尼佛の衣に覆はるることを爲ん。是の如きの人は亦世樂に貪著せじ。外道の經書・手筆を好まじ。亦復憙つて其の人及び諸の惡者の若しは屠兒、若しは豬・羊・雞・狗を畜ふもの、若しは獵師、若しは女色を衒

賣するものに親近せじ。是の人は心意質直にして、正憶念あり福德力あらん。是の人は三毒に惱されじ。亦嫉妬・我慢・邪慢・增上慢に惱されじ。是の人は少欲知足にして能く普賢の行を修せん。普賢、若し如來の滅後後の五百歲に若し人あつて法華經を受持し讀誦せん者を見ては、是の念を作すべし、此の人は久しからずして當に道場に詣して諸の魔衆を破し、阿耨多羅三藐三菩提を得、法輪を轉じ法鼓を擊ち法螺を吹き法雨の雨らすべし。當に天人大衆の中の師子法座の上に坐すべし。普賢、若し後の世に於て是の經典を受持し讀誦せん者は、是の人復衣服・臥具飮食・資生の物に貪著せじ。所願虛しからじ。亦現世に於て其の福報を得ん。若し人あつて之を輕毀して言はん、汝は狂人ならく耳。空しく是の行を作して終に獲る所なけんこ。是の如き罪報は當に世世に眼なかるべし。若し

之を供養し讃歎することあらん者は、當に今世に於て現の果報を得べし。若し復是の經典を受持せん者を見て其の過惡を出さん。若しは實にもあれ若しは不實にもあれ、此の人は現世に白癩の病を得ん。若し之を輕笑することあらん者は、當に世世に牙齒疎き缺げ、醜脣・平鼻・手脚繚戾し、眼目角睞に、身體臭穢にして惡瘡・膿血・水腹・短氣・諸の惡重病あるべし。是の故に普賢、若し是の經典を受持せん者を見ては、當に起って遠く迎ふべきこと、當に佛を敬ふが如くすべし。是の普賢勸發品を說きたまふ時、恒河沙等の無量無邊の菩薩百千萬億旋陀羅尼を得、三千大千世界微塵等の諸の菩薩普賢の道を具しぬ。佛是の經を說きたまふ時、普賢等の諸の菩薩・舍利弗等の諸の聲聞・及び諸の天・龍・人非人等の一切の大會皆大に歡喜し、佛語を受持して禮を作して去りにき。

運想

唱へ奉る妙法は、是れ三世諸佛所證の境界、上行薩埵靈山別府の眞淨大法也。一たびも南無妙法蓮華經と唱へ奉れば、則ち事の一念三千正觀成就し、常寂光土現前し、無作三身の覺體顯れ。我等行者一切衆生と同く法性の土に居して自受法樂せん。此の法音を運らして法界に充滿し、三寶に供養し普く衆生に施し、大乘一實の境界に入らしめ、佛土を嚴淨し、衆生を利益せん。

寶塔偈

（唱題のあとで必ずこの偈を拜誦して持ち難い法を持つ功德を感謝する事）

此經難持　若暫持者　我即歡喜　諸佛亦然
如是之人　諸佛所歎　是則勇猛　是則精進
是名持戒　行頭陀者　則爲疾得　無上佛道
能於來世　讀持此經　是眞佛子　住淳善地
佛滅度後　能解其義　是諸天人　世間之眼
於恐畏世　能須臾說　一切天人　皆應供養

回向文

若持法華經。其身心清淨。得聞此經。六根清淨。神通力故。增益壽命。

南無平等大會。一乘妙法蓮華經

南無久遠實成大恩教主釋迦牟尼佛

南無證明法華之多寶如來

南無十方分身三世諸佛

南無上行無邊行淨行安立行等之本化六萬恆河沙之諸大菩薩

南無文殊普賢藥王藥上彌勒妙音觀音等之。迹化他方來之諸大菩薩

南無舍利弗目連迦葉阿難等之。諸大聲聞

南無大梵天王。帝釋天王。大持國天王。大毘沙門天王。大增長天王。大廣目天王。大日天王。大月天王。大

明星天王。大摩利支尊天。七曜九曜二十八宿等。一
切之諸星天子。南無大黑福壽尊天。
南無開運北辰妙見大菩薩。南無不動明王。愛染明
王。歲德玉女神。三寶荒神。地神水神。八大龍王。妙法
國土大力神等。一切之諸大善神
御祈禱本尊鬼子母神。十羅刹女
末法鎭守七面大天女

南無最上位經王大菩薩
淨池院殿永運淸正日乘尊儀法樂莊嚴御報恩
南無天台妙樂傳教大師等。法華弘通之大士南無
妙法蓮華經
南無本化上行之御再誕末法有緣之大導師高祖
日蓮大菩薩六九中老僧等日朗。日像菩薩。大覺大
僧正久遠成院日親大聖人。行學院日朝聖人其外

諸檀林開基先師先德大恩御報謝南無妙法蓮華經

仰願。一天四海。皆歸妙法。後五百歲中。廣宣流布。宗門繁榮之御祈禱

南無妙法蓮華經。（これより御經どくじゆすべし どくじゆすみて後に唱ふる文左に）

天長地久。國土安穩。五穀成就。萬民快樂之御祈禱。

南無妙法蓮華經

奉唱。御經御題目の功德を以て。家內安全。子孫長久。運命增長。信力不退。怨敵退散。一切無障礙之祈禱

當家先祖代々〱。六親眷屬。法界萬靈（この所にてこゝろざしの精靈かいめうをよみあぐべし）

毎自作是念　以何令衆生。得入無上道　速成就佛身

願以此功德。普及於一切。我等與衆生。皆共成佛道。

妙法經力。卽身成佛。南無妙法蓮華經々々

餘慶之功力を以て。某無始已來謗法罪障消滅。信心增進。現當二世。大願成就之祈禱。南無妙法蓮華經。自今身至佛身迄。能持南無妙法蓮華經

○發願（讀經唱題回向の後ち必ず此文をよみて誓ひをなすべし）

衆生無邊誓願度　煩惱無數誓願斷　法門無盡誓願知　佛道無上誓願成　（唱へ終つて默禮一拜）

○御妙判要文（上の番號は他人と讀む時に其れを示す便利の爲である）

（一）立正安國論に云。所詮天下泰平國土安穩は君臣の樂ふ所、土民の思ふ所也。夫國は法に依て昌へ、法は人に因て貴し。國亡び人滅せば佛を誰か崇むべき、法をば誰か信ず可んや、先國家を祈りて、須く佛法を立べし。

○汝早く信仰の寸心を改めて、速に實乘の一善に歸せよ。然らば則ち三界は皆佛國なり。佛國其れ衰へんや。十方は悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや。國に衰微無く、土に破壞無くんば、身は是れ安全にして、心は是れ禪定ならん。此の詞、此の言、信ずべし崇む可し。

（二）如說修行鈔に云。天下萬民諸乘一佛乘と成て妙法獨り繁昌せん時、萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、吹く風枝を鳴らさず、雨壤を碎かず、代は義農の世となりて、今

生には不祥の災難を拂ひ、長生の術を得、人法共に不老不死の理、顯れん時を御覽ぜよ。現世安穩の證文、疑ひある可らざるもの也。

(三)祈禱鈔に云。大地は指ば外るゝとも虚空を繋ぐ者はありとも潮の滿ち乾ぬ事はありとも日は西より出づるとも、法華經の行者の祈の協はぬ事は有るべからず。法華經の行者を諸の菩薩人天八部等二聖二天十羅刹女等千に一も來て守り給はぬ事侍らば上は釋迦諸佛をあなづり奉り下は九界をたぼらかす失あらむ。行者は必ず不實なりとも智慧は愚なりとも身は不淨なりとも戒德は備へずとも、南無妙法蓮華經と申さば必ず守護し給べし。袋汚しとて金を捨つる事なかれ。伊蘭を憎まば栴檀あるべからず。谷の池を不淨なりと嫌はば蓮を取べからず。行者を嫌ひ給はゞ誓ひを破り給ふらん。

とくとく利生を授け給へと強盛に申すならば爭か祈の協はざるべき。

(四)御義口傳書に云。品々の初にも

五字を題し、終にも五字を以て結し。前後中間南無妙法蓮華經の七字也。末法弘通の要法唯此一段に是ある也。此等の心を失つて要法に結ばずんば末法弘通の師には足ざる者也。剩へ日蓮が本意を失ふ可し。日蓮が弟子檀那別の才覺無益也。妙樂の釋に云く子父の法を弘む世界の益ありと。子とは地涌の菩薩也。父とは釋尊也。世界とは日本國なり。益とは成佛也。法とは南無妙法蓮華經也。今又以て此の如し。父とは日蓮也。子とは日蓮が弟子檀那也。世界とは日本國也。益とは受持成佛也。法とは上行所傳の題目也。

(五)觀心本尊鈔に云。天晴れぬれば地明かなり、法華を識る者は世法を得べき歟。一念三千を識らざる者には、佛大慈悲を起して妙法五字の袋の内に此珠をつゝみ、末代幼稚の頸に懸けさしめ給ふ。四大菩薩、此人を守護し給はんこと、太公周公の成王を攝扶し、四皓が惠帝に侍奉せしに異らざるもの也。

（六）開目鈔に云。詮ずる所は天もすて給へ諸難にもあへ身命を期とせん。身子が六十劫の菩薩の行を退せしは乞眼婆羅門の責を堪へざる故。久遠大通の者の三五の塵を經る、悪智識に値ふ故なり。善につけ悪につけ法華經をすつるは地獄の業なるべし。大願を立てん。日本國の位を譲らん、法華經を捨てゝ觀經等に付て後生を期せよ。父母の頸を刎ねん、念佛申さずば。なんどの種々の大難出來すとも、智者に我が義破られずば用ゐじとなり。その外の大難、風の前の塵なるべし。我れ日本の柱とならん。我れ日本の眼目とならん。我れ日本の大船とならん。等と誓ひし願破るべからず。

（七）妙一尼御前鈔に云。夫信心と申すは別には之なく候。妻の夫をおしむが如く夫の妻に命を捨るが如く親の子を捨ざるが如くこの母に離れざるが如くに。法華經釋迦多寳十方の諸佛菩薩諸天善神等に信を入れ奉つりて南無妙法蓮華經と唱へ奉つるを信心とは申し候也。

字解

い

【一大事因緣】　最も大切なる因緣といふこと。佛が衆生濟度の爲めに種々の因緣を結びて世に出現し給ふ。法華經にては諸法實相の妙理を說くことが釋尊出世の最後の理想なれば、之を一大事因緣といふ。

【一乘】　一佛乘の略。權大乘が聲聞緣覺菩薩の得果各々不同なるを說くに對して、實大乘が一切衆生平等に成佛すべしと說く。この一切皆成佛の法を一乘の法といふ。

【一乘海】　一乘の法を海に喩へていふ。河川の同じく海に入りて同一味となる如く、三乘等しく一佛乘に歸して成佛すといふが故なり。

【一闡提】　又は一闡提伽、一闡底柯ともいふ。略して闡提と呼ぶ斷善根、信不具足等と譯す。本來解脫の因を缺きて到底成佛する能はざるもの、即ち無性有情の事。或は斷善根の爲めに佛の威力によりてのみ辛うじて成佛するを有性闡提といひ、又衆生濟度の爲めに故意に涅槃に入らざる大悲の菩薩を大悲闡提といふ。

【一佛乘】　一乘に同じ。又は佛乘ともいふ。一切の人類を皆同じく佛道を得しむる敎法なり。

【一眼の龜浮木の孔に値ふ】　嚴王品に出づ。腹に一眼ある龜、大海に浮び河にゆらるゝ中に朽木の穴あるに値ひ、之に乘りたるに風來りて朽木を覆へす、龜仰向になりし時、腹の眼朽木の穴と合して日月の光を見ることを得るとの喩。人身を受くること難く、佛法値ひ難きことに喩ふ。

【一切智】　三智の一。內外一切の法相、言敎に了達したる智慧。

【一切智者】　すべての智慧に明なる人。一切智、道種智、一切種智の三智を具足せる人。即ち佛陀の異稱なり。

【一切種智】　三智の一。一種の智を以て一切諸佛の道法に了達し一切衆生の因種を知り、種々の法門を觀じて諸の無明を破する智慧を云ふ。佛の智慧なり。この智慧はよく諸法の差別事相と平等の眞理との通達無碍なることに了達す。

【一切見者】　肉眼、天眼、法眼、慧

眼、佛眼の五眼を具足する者、即ち內外の眼明らかにして一切を見徹する者。佛の異稱なり。

【一切法空】 法師品による。凡眼に映ずる一切の法は有なるが如きもその實空無なり、之を一切法空といふ。この空無の體が即ち實相眞如なり。

【一相一味】 藥草喩品に依る。一相とは衆生の心相が同一眞如なるを云ひ、一味とは無量の法教同じく一理を詮顯するを云ふ。

【一心智慧】 分別品による。禪定と智慧となり。禪定によるが故に智慧益々明に、智慧によりて禪定うたゝ增長す。表裏一體、之を一心智慧と名つく。

【一世界微塵數】 分別品による。一四天下を微塵に碎きたる數をいふ

【一箭の道】 藥王品による。支那里程の二里なりと。又、弓射の的を懸くる處の射垜の一百五十步なりともいふ。

【因緣】 因と緣とをいふ。因とは結果に對して正しき原因となるものをいひ、緣とは因を助けて結果を生ぜしむる助緣をいふ。六因四緣を分つ。

【引導】 衆生を善道に引き導くこと

【因果】 因緣と結果、俱舍論等には六因、四緣、五果を說けり。一切諸法は因緣によりて結果を生じ、更にそれがまた因緣となりて新しき果を生み、乃至展轉して生滅流轉す。因あれば必ず之に應じて果ありとする、之を因果の道理又は法則といふ。善因に善果、惡因に惡果あるを因果應報といふ。

ろ

【漏】 煩惱の異名。漏は漏泄と熟し吾人の身口の堤を破りて善根の苗芽を損ずるが故に名く。

【露地】 ものに覆はれざる土地。三界の煩惱の繫縛をはなれたる界外安穩の土地。譬喩品の火宅の喩に於て長者の子火宅を逃れて大白牛車を露地に於て發見すとあり。

【六波羅密】 六度ともいふ。波羅密は梵音パーラミター、舊譯に度、新譯に到彼岸と譯す。生死の此岸より度して涅槃の彼岸に到るの意にて、菩薩の修する行なり。之に六あり。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、之を六波羅密といふ。

【六度】 前項六波羅密に同じ。

【六道】 六趣に同じ。

【六趣】 趣は趣き住むの意にして衆生が各々その業に從ひて趣き住む處を六處に分ちたるもの、六道ともいふ。地獄趣、餓鬼趣、畜生趣、修羅趣、人間趣、天上趣の稱。

【六銖】 藥王品による。一銖は一兩の二十四分の一なれば、六銖は一兩の四分の一に當る重量なり。

【勒沙婆】 苦行仙と譯す。身に苦樂の二分ありて、現世の苦盡くれば樂自然に生ずと主張す。

【六種震動】 神力品に出づ。大地震動するに六種あり。動、起、涌の三は形の變にして、震、吼、擊の三は聲の變なり。

【六神通】 六種の神通、六通ともいふ。天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、漏盡通の稱。

【路伽耶陀】 順世、惡論と譯す。世情を迎合し物慾のまゝにまかせよと教ふる順世外道をいふ。

【漏盡】 漏は煩惱のこと、諸の煩惱を斷盡せるをいふ。

は

【鉢】 鉢盂、鐵鉢ともいふ。具には鉢多羅。應器。應量器と譯す。僧侶の食器となす鐵製の鉢。

【鈸】 樂器の名、鈴の屬なり。二箇の皿の如きものを合せ、革を以て之を貫き、相打ちて樂を爲す也。

【婆稚】 四阿脩羅王の一、本經の聽衆なり。

【八道】 寶塔品による。八方の道路の意、八正道を表はしていふ。

【八萬四千の法藏】 佛一代の教法の總稱にして、法藏とは多くの法門をいふ。衆生の煩惱の病八萬四千あるが故に、之を對治せんとの法門亦八萬四千あり。

【八萬四千相好】 八萬四千の塵勞がそのまゝ佛の德相となれるもの。

【八解脫】 八背捨ともいふ。この觀を修して、欲界の五欲を背捨しその執著心を捨つ。その八とは內有色想觀外色解脫、內無色想觀外色解脫、淨解脫身作證具足住、空無邊處解脫、識無邊處解脫、無所有處解脫、非想非々想處解脫、滅受想定解脫、身作證具足住これなり。

【八十種好】 好とは相の細なるもの應身佛には三十二相に隨伴せる八十種の好あり。一、指爪狹長にして赤銅の色の如く薄くして細澤な

り。二、手足指圓長にして餘人に勝る。三、手足各々等しくして差異なし。四、手足圓滿柔軟にして餘に勝る。五筋脈盤結して通暢柔軟なり。六兩踝深く隱れて現れず七、行步正直なること鵝王の如し八、行步威容獅子王の如し。九、行步安平にして奩底の如し。一〇行步儀ありて威一切に震ふ。一一、回身顧視すること象王の如し。一二、支節殊勝にして一切滿修す。一三、骨節交結すること鈎鎖の如し一四、膝輪圓滿にして堅著妙好なり。一五、隱處妙好なること馬王の如し。一六、身支潤滑にして淨潔柔軟なり。一七、身容敦肅正直にして曲らず。一八、身支堅固にして透かす迦せず。一九、身支安定にして平正偏足す。二〇、身相端嚴にして黑からず靈からず。二一、身に圓光ありて長さ各々一丈二二、腹形方正にして橫文し。二三、臍深く右旋して圓滿妙好なり二四、臍厚く妙相ありて凸ならず凹ならず。二五、肌膚淨く容貌直し。二六、手掌充滿端直にして亂れず。二七、手文深長にして斷ぜず明直なり二八、唇色紅潤にして頻婆果の如し。二九、面門圓滿にして大ならず小ならず。三〇、舌相廣長丹赤にして薄く能く髮際に到る。三一、聲を發して威を震ふこと獅子の吼ふるが如し。三二、音韻美妙にして聲分具足せり。三三、鼻高く直くして孔現はれず。三四、諸齒方整にして白く根深し三五、諸牙明潔圓鋒利なり。三六、目廣く清淨にして眼睛に黑光あり。三七、眼相脩廣にして睫毛次第せり。三八、眼睫齊整にして牛王の如し。三九、雙眉修長にして黑澤細軟なり。四〇、雙眉綺靡にして紺瑠璃色なり。四一、雙眉高顯にして半月の如し。四二、耳厚く長く輪埵成就す。四三、兩耳相の好綺麗齊平なり。四四、容儀端麗にして見るもの厭かず。四五額廣く圓滿にして平正殊特なり四六、身分殊勝にして上下等し四七首髮長く紺青にして密なり。四八首髮香潔柔潤にして光滑あり。四九、首髮齊整す。五〇、首髮堅固にして斷落することなし。五一、首髮光滑ありて垢に染まず。五二身分堅實にして那羅延に逾へたり五三身體莊嚴長大にして端直。五四諸の竅淸く垢に染まず。五五、

身力充實して等しきものなし。五六、身相端嚴にして衆の見んことを樂ふ所也。五七、面輪修廣にして滿月の如く淨し。五八、顏貌舒泰にして笑を含む。五九面顏光澤ありて垢なし。六〇、身支常に嚴淨なり。六一、毛孔より妙香を出す。六二、面門より微妙の香を出す。六三、首の相好妙にして圓く平等也。六四身毛纖柔にして紺青の色に光澤あり。六五、法音圓辯機に從ひて普く應ず。六六、頂相高妙にして能く見る者なし。六七手足の指綱分明にして整ふ。六八行くに地を履まず、地を去る四指而も地に印文を現ず。六九、神力自ら持ちて他の衛るを待たず。七〇、威德遠く震ひて善き者は聞くことを喜び魔及び外道は慴伏す。七一、音聲和雅にして衆心を悅ばす。七二、機の淺深を見て類に從ひて說法す。七三、一音を以て演說し、類に從て解を得しむ。七四次第に說法して各々機緣に從ふ。七五、等しく有情を見て怨親平等なり七六、爲す所先きに觀て後に作し、各機宜に赴く。七七、相好具足して瞻視盡くるなし。七八頂骨堅實にして劫を窮むるも壞せず七九、顏容奇妙にして常に少年の如し。八〇、手足胸臆吉祥德相妙好具足す。

【跋陀婆羅】　菩薩の名、賢護と譯す

【跋難陀】　善喜と譯す。八大龍王の一、難陀の兄弟なりといふ。

【八王子】　序品による。二萬燈明佛の中、最後の燈明佛の未だ出家し給はざりし時の八子。有意善意、無量意、寶意、增意、除疑意、響意、法意これなり。

【八生】　分別品による。菩薩第四地より妙覺に至るまで八地あり一地を進む毎に一生すと。

【八相】　佛及び菩薩がこの世界に出現し衆生に隨順して一生の間に示し給ふ八種の相をいふ。受胎、降生、處宮、出家、成佛、降魔、說法涅槃。

【般涅槃】　涅槃に入ること。涅槃の項を見よ。

【頗梨】　具には塞頗梨迦、薩頗胝迦といふ。水玉と譯す、水晶これなり七寶の一に數へらる。

【婆利師迦】　雨華と譯す。雨を得て生ずる花の名なり。又、夏生華ともいふ。

【波利質多樹】　香遍樹、又は天樹王

と譯す。忉利天の喜見城にあり、一切樹木の王なりといふ。

【波羅密】 波羅密多の略、度、到彼岸と譯す。菩薩の修する行にして、この行によりて生死の岸を渡りて涅槃の彼岸に達するなり。之に六種または十種を別つ六波羅密の項參照。

【婆羅門】 淨行、淨裔と譯す。印度四性の階級中、最高位にあり波羅門教の全權を握る僧侶の階級なりといふ。

【波羅羅華】 花の名、譯して重生華といふ。

【波羅奈】 波羅奈斯の略名、中印度の國名にて、釋尊初めて說法せられし鹿野苑の在る地名。今のベナレス。

【寶女】 法師品による轉輪王の感得する七寶の一なり。七寶とは輪寶象、馬、珠、女、藏、兵をいふ。

【方便】 方法便用の義にて能く方法を用ひて衆生を敎へ導くこと之を法用方便といふ。又、眞實の對にて根機未熟にて深妙の法を受くるに堪へざる者の爲めに眞實に入るべきてだてとして暫く授くる淺近の敎をいふ、これ權假方便なり。又、正直を方といひ已れを外にするを便といふとありて、一切の差別をはなれたる正直門をもいふ。

【寶光天子】 日天子、日宮天子、寶意天子ともいふ。帝釋の內臣にして日輪を宮殿となせりといふ。

【薄拘羅】 善容と譯す。釋尊の弟子なり。

【波旬】 播禪、波鬼夜ともいふ。惡殺者と譯す。惡魔のこと。又は魔王の名。常に惡意を懷き惡法を成就し、僧を擾し人の慧命を絕つといふ。

【般若波羅密】 六波羅密の一。般若は智慧、一切皆空諸法實相の眞理を證悟する智慧。以て菩薩は彼岸に達するを得べし。

に

【日月燈明佛】 序品に顯はるゝ佛名久遠の昔に出で、衆の爲めに頓漸大小の諸敎を說き、後に開權顯實して法華經を說き給ふ爾來同名の佛、二萬出世して說法し給へりといふ。

【日天子】 日宮天子、寶光天子、寶意天子、ともいふ。四天王に屬し日輪を宮殿として四天下を照曜すといふ。

【如】 諸法のありのまゝのしがた。諸法の本性、理性、眞如、實相等時により處によりて變異なきこと。如同又は契如の義にして、如同は理の一味平等を顯し契如は所契の眞理なることをあらはす。

【如意寶珠】 梵名眞多摩尼。意のまゝに種々の珍寶を出すが故に如意寶珠又は如意珠といふ如意輪觀音はこの珠を兩手に持ち給ふ。又娑竭羅龍王の宮殿にもありといふ。

【如來】 佛の十號の一。梵名、多陀阿伽度。如は眞如にて、眞如より來生せるもの、眞如より顯現せるものといふことにて佛陀の稱なり

【如來の室、如來の衣、如來の座】 法師品による。之を三軌といふ如來の室とは大慈のこと、如來の衣とは柔和忍辱のこと。如來の座とは一切法空のこと。佛はこの室に入りこの衣を著け、この座につきて法を說くべしと敎ゆ。

【如是因】 十如是の一。諸法の各が先天的に具せる十界の因。因とは果を招く親因なり。

【如是報】 十如是の一。萬有の一々が先天的に具せる十界の報、(緣より生じたる結果、即ち報果)をいふ

【如是本末究竟等】 十如是の一。本とは如是相を指し、末とは如是報を指す。この本より末に至る、みな三諦の妙理を含むを以て究竟して等しといふこと。

【如是力】 十如是の一。十界の諸法一々に先天的に具へ持てる十界の勢力、能力をいふ。

【如是體】 十如是の一。萬有の一々が先天的に具せる十界の體。地獄人天等の體質。

【如是果】 十如是の一。萬有の一々が先天的に具へたもてる十界の果(因によりて生じたる正しき果、即ち習果又は等流果)。

【如是緣】 十如是の一。萬有の一々が先天的に具せる十界の緣。緣とは因をたすくる助緣、即ち報因又は增上緣。

【如是作】 十如是の一。萬有の各が先天的に具せる十界の作。作とは事を造作し構造する作業、作用。

【如是相】 十如是の一。萬有の一々が先天的に具へたる十界の相。相とは外面に表はたるすがた。

【如是性】 十如是の一。萬有の一々が先天的に具へたもてる十界の性。性とは內面的不變の性質なり。

【如說修行】 如來の說き給ひし通り

に、あやまりなく修行すること。

【肉髻】 佛頂に一肉團ありその狀髻の如きをいふ。この相は師長に孝順なるより起るといふ。

【肉眼】 五眼の一。肉身に具ふる吾人の眼。

【尼犍子】 離繫子、無慙子等と譯す。苦行を以て涅槃を得るの勝因と計する外道なり。

【二乘】 乘は運載の義にて生死の此岸より衆生を運載して涅槃の彼岸に至らしむる教法、法門をいふ。而して二乘とは聲聞乘と緣覺乘となり即ち聲聞及び緣覺が各その果を證すべき法門なり。又聲聞、緣覺の人を指しても二乘といふ。菩薩乘の佛道を得べしと教ゆるに對す

【二足尊】 兩足尊といふに同じ。佛の異稱。

【忍辱】 六波羅密の一なり。苦痛屈辱に對しても受くべきとして受け曾て怨恨の念を懷くことなきをいふ。

【忍辱地】 生忍（瞋、罵、捶打等の有生より受くる凌辱を忍ぶこと）法忍（寒熱、風雨、飢渴、老死等の非情的の禍害を忍ぶこと）に安住して動かざるを大地に喩へていふ。

【忍辱の鎧】 忍辱は一切の謗難を防ぐが故に之を甲鎧に喩へていふ。

【忍辱の衣】 前項忍辱の鎧に同じ又、袈裟を指していふ。

【人、非人】 人とは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆。非人とは天龍、夜叉、阿修羅等の八部衆、みな本經の聽衆なり。

【仁者】 對者を尊敬して呼ぶ語、文殊、彌勒等說法中に互に對者を呼びかけていふ。ナンヂとも讀む。

ほ

【法印】 眞理のしるし。經典の實僞は法印によりて決定す。法華經は實相印といへる一方印を特色とし小乘の三法印に對す。

【法音方便陀羅尼】 勸發品に出づ中道に入るが故に法音說法に於て自在の方便を得、即ち中道の聖智をいふ。

【法雨】 教法のこと。法の衆生を教化すること雨の草木を潤ほすが如くなるを以ていふ。

【法界】 宇宙、世界、事理物心すべてを該羅しての世界。事法界理法界等の別を立つるあり。又眞如、萬有の本體をもいふ。

【法輪】 正法の能く衆生の邪惡を摧破するを輪王の輪寶に喩へていふ

【法輪を轉ず】 教法を說きて邪見を破り正道を開くこと。輪寶のよく一切の障碍を破りて道路を開通するに喩ふ。

【法喜】 佛法を聽受して生ずる喜び

【法器】 佛法を受くるに堪ふる根機の人。

【法喜食】 二食の一。又五食の一法喜によりて慧命を養ふこと。開法隨喜して善根增長するを得れば、慧命を資益して、恰も食物の肉身を養ふが如くなる故に法喜食と名く。

【法鼓】 鼓は兵を誡むる爲めに擊つもの、之を妙法の諸惡を退治するに喩ふ。

【法位】 諸法の本來住すべき位。即ち實相の理。

【法王】 佛の異稱。

【法王子】 菩薩を敬稱していふ。佛の法王の繼承者なるが故なり又特に彌勒菩薩を呼ぶ。

【法螺】 螺は貝にて印度の俗習として號令を發せんとする時遠く聞ゐしめんとして之を吹く。以て大法の遠く聞ゆるに喩ふ。

【法會】 說法、佛事を營む會合。

【法服】 袈裟をいふ。大衣、七條五條の三あり三衣ともいふ。

【法藏】 法門の藏。佛說の眞理を蘊蓄せる藏といふこと。

【法師】 佛法宣傳の人師。

【法性】 涅槃の別稱涅槃は法の實性なるが故にこの名あり。

【法施】 法を說きて他人に聞かしむること。財施に對す。

【法華經】 妙法蓮華經の略。本經の題目なり。

【菩薩摩訶薩】 菩提薩埵摩訶薩埵の略。更に略して菩薩ともいふ覺有情、大心衆生と譯す。又、大士、高士、開士等と譯せらる。

【菩提】 覺、道、智等と譯す。佛陀の正覺道にして、之に志すもの、等しく理想として歸入すべき道なり。

【菩提樹】 諸佛の菩提を成じ給ふ時に坐し給ふ道場樹なり。この樹下に得道し給ふを常とす。釋尊の菩提樹は畢波羅樹なりき。

【菩提心】 菩提を求むる心。道心菩薩が上は大菩提を求め、下は一切衆生を化せんと大誓願を發す大心

を云ふ。

【拂】　拂子のこと。拂塵ともいふ獸毛を束ねて柄を付す。蚊蚋を拂ふ具なり。今は法式にも用ふるに至れり。

【煩惱】　また惑ともいふ。吾人の心身を煩擾惱亂する精神作用なり。之に根本惑と隨惑とあり。又分ちて百八の煩惱、八萬四千の煩惱となし、又事理によりて見惑、思惑の別を立て、或は見思、塵沙、無明に分つ。

【煩惱濁】　五濁の一。末世に及びて衆生煩惱の爲めに惱亂せられて邪行盛になるを云ふ。

【煩惱魔】　四魔の一。煩惱は心身を惱亂すること惡魔の如くなるを以て煩惱魔と呼ぶ。

【本願】　因本の願。因位の願。佛が自ら佛たらんが爲めに因位に於て發す誓願。

【梵天】　色界の初禪天。また第四禪天。

【梵天王】　色界初禪天の主にしてまた三界の主なり。名を尸棄といふ色界大梵天中の高樓に住し、梵衆梵輔の二天之に從ふ。

【梵行】　五行の一。梵は清淨の義にして、清淨なる行の意にて梵行といふ。菩薩が空有二邊の染著をはなれて清淨慈悲の心を以て衆生を拔濟するをいふ。

【梵志】　修行中の婆羅門にて、婆羅門生活の四期中の第二期。師に就て修學する間を云ふ。

【梵世】　色界初禪天にある大梵、梵輔、梵衆の三天をいふ。

へ

【表刹】　刹は刹多羅の略にして幢竿（ハタザヲ）の類なり。塔の上に高く揭ぐるはたさほを表刹といふ。

【便利】　授記品による。大小二便のこと。

【變化身】　二乘及び凡夫を化益せんが爲めに化現したる佛身。

【辯才】　辯舌の才能。辯論の巧みなること。

【徧淨】　法師品による。色界十八天の第九。三禪天の第三。この天徧く清淨なるが故にこの名あり。

と

【度】　生死の海を渡りて涅槃の岸に至ること。又、迷に沈める衆生を救ひて悟に入らしむること。

【度脫】　證悟に同じ。前項の初に同じ。

【兜率天】　覩史多、兜率陀、都史多等とも云ふ。妙足、知足止足等と譯す。欲界六天の第四。須彌山の項上十二萬由旬の處にあり。七寶の宮殿ありて無量の諸天之に住し内外二院ありて内院は四十九院にして彌勒此にありて說法し、閻浮提に下生成佛する時の來るを待てり。蓋し六欲天中、下の三天は欲情に沈み上の二天は浮逸の心多したゞこの兜率天のみ沈にあらず浮にあらず、五欲樂に於て喜足の心を生ずるが故に彌勒等の補處の菩薩の止住する處となるといふ人間の四百歲をこの天の一晝夜とし、天壽四千歲、（人壽五十七億六百萬歲）なりといふ。

【幢幡】　幢と旛。幢ははたほこ。多く竿の頭に龍頭の形を付し、絹布を垂下す。旛に鬼形旛菩薩形旛の二種あり、前者は軍事に用ひ、後者は佛法の幢なり。之を堂中に懸く。

【等覺】　五十二位の第五十一位。等正覺、金剛心、一生補處、有上士とも名く。因地の最上位にして果上の妙覺に比すれば猶一等の別あれども、僅かに一品の無明を殘せるのみにて殆んど佛の正覺に等しきを以て等覺といふ。

【幢相】　袈裟の異名。邪惡の爲めに動かされざること幢の如くなるを以てなり。

【等正覺】　梵名三藐三菩提。正等覺とも譯す。佛のさとり。等は平等正は方正、覺は覺智の義なり。又等覺と同じく用ゐらる。

【德本】　諸善萬行の根本、佛果菩提の因本となるもの。功德の本をいふ。

【得大勢】　梵名摩訶那鉢。大勢至とも譯し、略して勢至と云ふ。菩薩の名。阿彌陀佛の右側の脇士にして一切の智慧を司る。

【讀誦】　經典を讀みあぐること。經說の如く修行する用意に讀誦するも也。又經を誦して佛德を讚嘆することゝもなれり。

【德叉迦龍王】　視毒、多舌と譯す八大龍王の一。

【兜樓婆、畢力迦】　藥王品に出づ香料なり。兜樓婆は香、畢力迦は苜蓿なりと。

また前者は白茅後者は丁香ともいふ。羅什は龍神國に產して此土に無きが故に飜せずといへり。

【貪欲】　三毒の一。已が情に適順せる境に愛著してむさぼる心をいふ

【貪著】　貪欲の心を起すをいふ。むさぼり著す。

【貪愛】　前項に同じ。

ち

【智】　慧のこと。外界の事象を辨別し邪正を判ずる精神のはたらきをいふ。

【知道者、開道者、說道者】　藥草喩品に出づ。智道は意業、開道は身業、說道は口業にて、三業が道智と伴ひて過失なく、悉く道のまゝなる活動となるをいふ。

【持戒】　六波羅密の一。佛の制定し給ひし戒律を護持して犯さゞること。

【畜生】　梵語には底栗車。傍生、橫生とも譯す。六道、三惡趣の一。性質闇鈍にして自立せず、他の爲めに畜養せうるゝ生類の義なり。禽獸虫魚等皆之に屬し苦多く、樂く少くして唯貪欲婬欲の情のみ强く。父子兄弟の別もなく相殘害す。惡業を作り愚痴多き衆生、死して惡業畜生に生る。

【知見波羅密】　六波羅密中の般若波羅密。智慧に同じ。

【長者】　豪族の稱。法華文句には姓貴、位高、大富、威猛、智、年耆行淨、禮備、上歎、下歸の十德を具せるものゝ稱とせり。

【貞實】　誠實の心ありて法を受くるに堪ふるもの。

【定慧】　禪定と智慧となり。共に六波羅密の一。

【著】　執著、染著等と訓ず。凡夫が三界に、二乘が涅拌に、菩薩が所證の法に執著するが如きこれなり

【智慧】　般若波羅密なり。よく明かに諸法の事理性相に了達すること。これ菩薩到彼岸の行の一なり。

【地獄】　三塗、三惡趣、六道の一梵名那落迦。無幸處と譯す。地獄といふは義譯なり。閻浮提の地下にあり、八寒、八熱等ありて罪人の受苦極りなし。

【杻、械、枷、鎖】　普門品に出づ杻はてかせ、械はあしかせ、枷はくびかせ、鎖はくさり。

【持經者】　法華經を讀誦し供養し流布する人をいふ。持法者。

【中千界】　小千世界を千箇集めたる世界。

【地種】　地大のこと。世界を生成する原質として四大種を立つ。即ち地大、水大、火大、風大なり。その一たる地大を地種ともいふ。種とは原質の意なり。

【智積】　菩薩の名。この菩薩は多寶如來の所從なり。

【濁刧】　刧濁に同じ。五濁ノ一。末世に至り饑饉の疾疫、刀兵等頻りに起るをいふ。

【塵點刧】　極めて長久なる時間をいふ。三千塵點刧、五百塵點刧の目あり。微塵數刧といふに同じ。

【沈水】　香木の名。印度等の熱帶地方に產す。その木心も枝節も堅く重くして水に沈むが故にこの名あり。

り

【離婆多】　梵音レーワタ。室宿、奎宿と譯す。釋尊の弟子なり。

【靈鷲山】　耆闍崛山の譯名。中印度にあり。この山には多くの靈仙居住し、また多くの鷲鳥遊集するが故に名くといふ。また鷲頭山、鷲峰、鷲峯ともいふ。釋尊この山頂に於て說法し給ひしこと多し。法華經もその一なり。

【靈山】　靈鷲山に同じ。

【兩足尊】　佛の尊稱。佛は兩足なる人天中の最勝尊なるが故なり。

【利根】　鈍根の對。才智するどき機類。

【龍】　梵名那伽。もと印度に住せる龍種族の蛇類崇拜の神話より起り烏龍、蛇龍、蝦蟆龍、馬龍、魚龍の五種ありといひ、支那には蛟龍應龍、虬龍、螭龍蟠龍等をいふ。善龍惡龍ありて善龍は佛法歸依の人を護り、時々甘露を降らして五穀を成熟せしむ。八大龍王あり。

【龍宮】　龍王の住む宮殿にして水底叉は水上にありといふ。長阿含經には娑竭羅龍王の宮殿は大海の底に、難陀、跋難陀二龍王の宮殿は須彌山と法陀羅山との中間にありみな七寶を以て莊嚴せらるとあり其他の諸經にも種々の說あり。

【龍神】　海中に住して雨水を司る不思議の力用を有すといふ畜生界に屬す。

【龍女成佛】　提婆品に出づ。娑竭羅龍王の女、年はじめて八歲、智すぐれて文珠菩薩の化導によりて諸

法實相の理を悟り釋迦佛の前に來りて變じて男子となり、南方無垢界に成佛すとあるをいふ。

【力】 信、勤、念、定、慧の五根によりて欺、怠、瞋、恨、怨の五障を破る力、之を五力といふ。

【力無畏】 自在神力ありて世間に怖畏すべきものなきをいふ。

る

【瑠璃】 吠瑠璃、吠瑠璃ともいふ青玉、青色寶と譯す。寶石にて七寶の一に數へらる。

【流通】 佛法の末代に流れ弘まること。

【累刼】 刼をかさねること。悠久なる時間をいふ。

【流轉】 迷界に生死をつゞけ、六道四生の間を迷ひ廻ること。眞理に背きて迷情に從ひ墮落向下すること。

を

【怨家】 自己に對して怨恨をふくめる人。

【怨憎會苦】 八苦の一なり。互に怨憎せる人と會合せざるべからざるの苦痛をいふ。

【怨嫉】 障未だ除かざるを怨といひ聞くを樂せざるを嫉といふ。

【怨親平等】 大慈悲を本とせる佛教は怨に於ても親に於けると同樣に視るといふこと。

わ

【王難】 七難の一。王法の責より受くる苦難。

【往覲】 菩薩衆等が佛所に往きて佛の依正を見たてまつること。

【往生】 死後、極樂又は兜率に生るゝこと。

【王舍城】 中印度摩訶陀國の都城紀元前六世紀、頻婆娑羅王の築くところ、その子阿闍世王また茲に都し、釋尊の最も多く傳道し給ひし地なり。

【和脩吉】 多頭、寶稱と譯す。八大龍王の一。

か

【戒】 梵名尸羅。三學、六度の一防非止惡の意にて身口意の惡を制すること。五戒、十戒、二百五十戒との目を立つ。

【海潮音】 普門品による。衆生利益の德を海潮の干滿時に應ずるに喩ふ。

【海此岸】 藥王品に出づ。須彌山の內の海の此岸、こゝに栴檀香を生ずといふ。

【開經】 結經の對にて、佛が本經を說き給ふ前に豫備として說き給ふ序經のこと。法華經に對する無量義經の如し。

【戒行】 受戒の後、戒法に從ひて修行すること。

【迦陵頻伽】 迦陵頻、迦樓頻ともいふ。妙聲、好聲と譯す。鳥の名。其聲の妙なること餘鳥に超ゐ如來の音聲を除きては天人等も及ぶものなしといふ。雪山に居るといひ又極樂の鳥ともいふ。

【迦留陀夷】 黑光、黑曜と譯す。佛弟子なり。初め釋尊の太子たりし時の師なりと云ひ、又波斯匿王、末利夫人の師なりとも云ふ。

【迦樓羅】 金翅鳥、妙翅鳥と譯す龍をとりて食ふと云ふ鳥類の王大乘經典の中には之を八部衆の一に數ふ。

【皐諦】 十羅刹女の一。また何所ともいふ。

【覺】 佛陀の譯なり。又菩提の譯にて證り得たる覺智を云ふ。又譬喩品によるに、念、擇、勤、喜、輕安、定、捨の七覺支をいふ。覺支とは修道の時その眞僞善惡を觀察覺了するをいふ。

【角貝】 角にて作れる一種の樂器なり。

【伽陀】 頌、諷頌と譯す。十二部經の一。歌唱に適するやうに作られたる韻文なり。祇夜（長行と重れたる韻文）と區別して之を孤起頌、不重頌と稱す。

【學、無學】 小乘聲聞乘の四位の證果の中、阿羅漢を無學の聖者といひ、須陀洹、斯陀含、阿那含を有學の聖者といふ。

【渇仰】 渇して水を求むるが如く導師の敎を仰信すること。

【合掌】 兩の掌を合せておがむこと印度に於ける敬禮の一種なり。

【迦耶迦葉】 三迦葉の一人なり。初め事火外道なりしが、後二兄と共佛弟子となり、釋尊高足となれり。

【迦耶城】 印度摩訶陀迦耶國のパトナの西南に位する市なり。釋尊この都城の南方七英里の地にて成道したまへり。

【我慢】七慢の一。四根本煩惱の一にて、我を恃みて心に憍る煩惱。

【甘露】梵語、阿密哩多。不死、天酒とも譯す。もと吠陀に出で初はソーマの汁を謂ひしものゝ如し。美味にして靈藥、諸神の飲料たりまた天より降る甘き露と見て甘露と名けしならん。古來、支那、日本にて政治その當を得れば天地その端として降らすと云ひ傳ふ。

【甘露法】如來の教法を云ふ。法味うるはしく衆生の心身を養ふことを甘露の德に喩へたるなり。

【龕室】佛像を安置しまいらずる厨子。

よ

【欲界】三界の一。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上（六欲天）を總稱す。此界の衆生は下は地獄より上は天界に至るまで、男女多く食欲、色欲、眠欲等の諸欲に耽るが故にこの名あり。

【欲愛】四求の一。欲界の諸の境界に對して貪愛の煩惱を起し、求めて止まざるを云ふ。

【欲染】欲は貪欲染は心性をけがす意にて煩惱のこと。貪欲の煩惱諸欲に染着するをいふ。

【浴佛】灌佛に同じ。

【預流果】聲聞四果の一。梵語に須陀洹と云ふ。三界の見惑を斷じ盡して修道に入りたる位。初めて聖者の流類に預る位なり。

【餘乘ノ若二若三】方便品に一乘の外に餘乘あることなしと說く即ち一乘教のみ眞實の教にして二乘三乘の教は方便の權說として捨てらるべきと說く。餘乘とは一乘以外の二乘三乘のことなり。

た

【諦】眞理。眞實にして虛妄ならざる義。

【提婆達多】又は調達とも寫す。斛飯王の子にて釋尊の從弟に當る。出家して佛弟子となりしも佛の威勢を嫉み、五百の衆を率ゐて別立し、阿闍世王と結托して佛を亡ぼし摩訶陀國の教權を握らんと企てゝ成らず。阿闍世改悔して黨を離るに及び事益々非にして死せり。佛傳によれば逆罪の爲めに生きながら墮獄せりといふ。然れども本

經提婆品によるに提婆達多は我が過去の善知識にして未來に天王如來たるべしとの記莂を授け給へり。

【大般涅槃】また摩訶般涅槃ともいふ。大滅度と譯す。大乘の涅槃、佛の證をいふ。

【大忍力】勸持品に出づ。忍は忍辱にて苦難に對して忍辱する行をいふ。

【大梵天王】梵天王に同じ。

【大阬】大いなる阬。無間地獄のこと。

【大刧】四中刧を一大刧となし。一中刧に廿小劫あるを以て一大劫は八十小劫なり。又、方高百二十里の石を長壽の天人が三年に一度、重さ三銖の天衣にて拂ひ、遂にこの石の盡くるに至る間をいふ等とあり。

【醍醐】五味の一。熟酥の上に浮べる油の如きもの、牛乳を最精製して得るもの。佛性のことに喩ふ。

【大通智勝佛】三千塵點劫の昔出世せし佛。この佛在俗して國王たりし時に十六人の王子あり。みな出家して成佛す。阿閦、彌陀、釋迦等即ちこれなり。

【第三の諦】苦集滅道の四諦中、第三の滅諦をいふ。譬喩品による。

【第三の安樂行】安樂行品による意安樂行をいふ。

【大千界】大千世界ともいふ。三千大千世界の略。

【大善寂力】不輕品による。善寂とけ禪定のこと。心に深く禪定を得れば、自ら大力を得るなり。

【大乘】摩訶衍那の譯。小乘に對する大人の所乘にして大苦を滅し大利益を與ふる教法。菩薩の大機が六度の大行を修して大涅槃を得るの法門なり。

【胎生】四生の一。人畜等の如く母の體內にて發育を遂げ、母體より形を整へて生ずるをいふ。

【大乘經】小乘經に對す。菩薩の爲めの高妙なる法を說ける經。

【大乘の空の義】提婆品。一切法の空を觀ずること。即ち諸法實相の義なり。

【大自在天】色界の主、摩醯首羅天なり。外道はこの神を以て世界の本體なりとし、又創造の神となし一切衆生の苦樂昇沈みなこの神の意中にありとせり。

【大衆】多勢の人々、多くの僧衆。

【大信力、及び志願力、諸の善根力】法師品による。一體の三寶と中道

の妙戒とを信ずるを大信力とし、四弘誓願を信ざるを志願力とし、實相の大智に立つを善根力とす。以上を三力といふ。

【多寶如來】　往昔、東方無量千萬億阿僧祇の世界を過ぎて在りし寶淨國に在せし佛。この佛初め若し我成佛せば十方世界中法華經を說く處に我が寶塔を涌出して、ために證明せんとの大誓願を發して成佛し給へる佛なりといふ。

【多伽羅】　香料なり。譯して根香又は木香樹といふ。

【多陀阿伽度】　梵音タターガタ、譯して如來といふ。佛十號の一。

【道】　道には通入、輪轉、軌路等の諸義あり。五道、六道等の道は輪轉の意にて、各々の業因によりて輪廻する世界を云ひ、又人道、佛道等の道は軌路の義にて踏み行ふべき道の意。又正道邪道等の道は結果に通入すべき道の意なり。又菩提を道ともいふ能證の人、所證の眞理に契入するが道なり。又、本經譬喩品には特に正見、正思惟正語正業、正命、正勤、正念、正定の八正道を指して道といふ。この八、理に契ひ中正にして涅槃に至る道なるか故なり。總して悟に達すべき無漏の行を道と名く。

【塔】　卒塔婆の略。塔婆とも云ふ方墳、廟と譯す。塔廟も同義なり。

【忉利天】　三十三天と譯す。六欲天の第二。須彌山の頂、閻浮提の上八萬由旬の處にあり。城廓また八萬由旬にして喜見城と名く。帝釋こゝに居る。四方に峯ありて各八天あり、中央の喜見城天を合して三十三天となる人間の百年を以て一日一夜とし天壽一千歲。

【道果】　さとり。さとり得たる菩提

【道記】　成道することを得べしとの記莂。

【導師】　衆生を佛道に導く師。迷を破りて悟を得しむる師。佛、釋尊を特に稱することもあり。

【道場】　諸佛の正覺を成し給ふ場所をいふ。又、一般に佛敎を說き佛道を修する場所。

【道場樹】　又、道樹とも略稱す。釋尊が伽耶城附近の畢波羅樹下の金剛座に成道し給へる如く、諸佛の成道もつれにその道場に樹あり、之を道場樹といふ。

【多羅樹】　樹名。形椶櫚の如く、高さ七八丈に及ぶ。物の高さを量る尺度に用ゐらるゝに至れり一多羅

樹は四丈九尺に當るといふ。又この葉の上に針を以て經文を刻して梵夾となす。

【陀羅尼】　總持、能持等と譯す。支那の禁呪に似るが故に呪ともいふ種々の善法、廣大の義理を集め攝して散失せしめず、諸惡を捨離して善を持つこと。又衆德を具足せる經文又は名號をいふ。この陀羅尼をたもち、又はその如く衆德を具する菩薩を陀羅尼の菩薩といふ。

【多摩羅跋】　香料の名。性無垢、藿葉香と譯す。

【多摩羅跋栴檀香如來】　目連尊者成佛の名。

【檀波羅蜜】　六波羅蜜の一。布施（慈善）の行なり。

【斷苦の法】　方便品に出離解脫を敎ふる敎法の意に用ゐたり。

そ

【蘇燈】　酥燈とも書く。牛酥に香油を加へて燈すもの。

【僧】　僧伽の略。衆と譯す。三寶の一。和合衆のこゝろにて、三人以上一所に集りて和合し修行する者出家の團體なり。後轉じて、佛門に入り袈裟を纏ひ法を傳ふるもの一人にても僧といふ。

【繒蓋】　絹にて造れる大傘。

【蘇油】　蘇曼那といふ植物よりとりたる油。

【增上慢】　四慢、七慢の一。殊勝の法及び證を自ら得ざるに得たりと思ひて憍ぶること。

【孫陀羅難陀】　端正歡喜、艷喜と譯す。釋尊の異母弟。在俗の時に孫陀利と名くる女を娶りしが故にこの名あり釋尊成道の後强ひて出家せしめられたるが、諸根を調伏することと第一と稱せらるゝに至れり

つ

【塗香】　身體に塗る香料。紫白檀及び沈香を磨り、水に和して塗る。身體の惡臭を去り、淸淨ならしむるなり。

【通利】　敎を領解して利益を得ること。又、理に通達すれば利刀を得たるが如きをいふと。

【通力】　神通力に同じ。通は障なく行はるゝ意にて、すべてのことに通達して自由自在なる力用を有するに至る、その力を通力といふ。

と同義にて、煩惱の垢を洗ひ去りて佛道を求むること。

【頭陀】斗籔、修治等と譯す。修行と同義にて、煩惱の垢を洗ひ去りて佛道を求むること。

【頭面作禮】接足頂禮、接足作禮とあると同様なり。頭面を垂れ對手の前に跪き、兩手を延べて掌の中以て對手の足を承け、自己の頭面に接せしめて禮拜するをいふ。印度に於ける最敬禮なり。

ね

【涅槃】又泥洹、涅槃那とも云ふ梵音ニルヴーナ。滅度、圓寂等と譯す無爲、無作、無上等種々の稱あり迷妄を脫し眞理を究めて寂滅無爲の法性を究め、不生不滅の法身の證に歸するを云ふ。佛の證果なり。又菩提なり。

【鐃】樂器の一種。小鉦なり。鈴の如くして舌なし。軍中に用ゐたるものなり。

【遶佛】佛の周圍をめぐること。行道に同じ。印度の古き禮法なり。三匝、七匝等あり。遶佛の間は五法を守り、以て次世に五福を期す。

【然燈佛】錠光如來に同じ。梵名を提恕竭羅といひ、燈作とも譯す。過去久遠の昔に出現し給ひし佛にて、釋尊に授記し給ひし師佛なり。

【念佛】すべて佛に對し、その相好を觀察し、功德を憶想し、名號を稱念する等の事を爲しこと後には阿彌陀佛の名號を稱念する意に用ゐらるゝに至る。

【念誦】稱念に同じ。心に念じ口に稱ふること。

な

【泥洹】涅槃に同じ。その項を見よ。

【泥犂】奈落に同じ。地獄なり。

【那提迦葉】三迦葉の一人。初め事火外道なりしが、釋尊成道の第一年に摩訶陀國の苦行林に於て歸佛せり。

【那羅延】略して那羅とも云ひ、又具に那羅延那ともいふ。人本生、堅固力士と譯す。天界の力士にして、力量大象の七十倍ありといふ。力を求むる者、この神に祈れば、力を與へらるゝといふ。

【奈落】泥犂、那落迦ともいふ。地獄に同じ。

【南無】歸命、敬禮、歸敬と譯す歸依敬順の義なり。

【納衣】如法衣。僧の著る衣服なり

【那由佗】數名。百阿由佗を一那由佗と爲す。或は萬億といひ、或は千億といひ、或は數千萬といふ。

【難陀】孫陀羅難陀に同じ。又難陀跋難陀を見よ。

【難陀跋難陀】喜、善喜と譯す。八大龍王中の難陀龍王、跋難陀龍王と、兄弟なり。共に摩訶陀國を守り、說法の會座に法雨をそゝぎ、又佛法を守護すといふ。

ら

【禮拜】合掌供敬して佛菩薩の前に跪き、低頭敬禮して拜み奉ること

【來迎】命終の時に臨みて佛菩薩がその前に來現して淨土に迎へ取り給ふこと。

【羅網】あみ、天界及び淨土を莊嚴するに寶の羅網を以てすること見ゆ。

【羅睺羅】又は羅と云いふ。佛の子にして佛十大弟子の一人、密行第一と稱せらる。佛成道して鄕里に歸り給ひし時に出家せり。

【羅刹】羅刹婆、落刹婆ともいふ、可畏、護者、食人鬼と譯す。惡鬼の通名なり。

【卵生】四生の一。鳥魚類の如く卵殼によりて生るゝものをいふ。

【欄楯】てすり、欄は勾欄、楯は欄檻なり。又縱なるを欄といひ横なるを楯といふと。

【藍婆】十羅刹女の一。譯して結縛といふ。

む

【無漏】有漏に對す。漏は漏泄と訓し煩惱の異名なり。淸淨眞實にして煩惱の穢なきを無漏といふ。

【無漏法性】煩惱の汚なき萬法の實性。即ち眞如實相のことなり。

【無漏智】有漏煩惱を離れたる淸淨無垢の無慧。

【無漏道】無漏の因道。見道以後の聖者が無漏の智を以て修する四諦六度等の觀行をいふ。

【無漏の根、力、覺、道、禪定、解脫三昧等】譬喩品による。無漏の五根、五力七覺支、八正道四禪定、八解脫、三三昧のこと。

【無等等】佛の異名、佛は最極頂に位し、與に等しきものなきが故に

無等といふ所謂無等の等なり。

【無量】量りなきこと、廣大なることを讃嘆していふ。又、方便品等には、慈、悲、喜、捨の四無量心を指していふ。

【無量慧】佛智の廣大なるを讃嘆していふ。又、佛を指していふ佛は無量の智慧を具足するが故に、これは報身は慧を體とするが故に特に智德の無量を以て佛を呼ぶ。

【無量義經】法華經の前序の經なり一卷、蕭齊の曇摩伽耶舍の譯。德行品、說法品、功德品の三品より成る。

【無量義處三昧】序品に出づ。釋尊が法華經を說くに先ち、まづ入りたまひし禪定の名。無量義とは、無量の法が此經の諸法實相の一義より生出するの義に名く。三昧とは定の梵名なり。

【無價の寶珠】五百弟子品に出づ價値の知るべからざる貴重なる寶珠

【無餘涅槃】有餘涅拌に對す。煩惱を斷盡して終には煩惱の習果たる肉身も精神とともに滅し、所謂灰身滅智したる處に顯れたる理想境

【無相】信解品に出づ。三解脫門の一。解脫を得る三種の方法中萬有に差別の相なしと觀ずること。

【無央數劫】無央數は梵語阿僧祇の譯語。央は盡なり。無盡數の劫波の義、無限の長年月。

【無爲】爲は爲作造作の義にて生滅變化するものを云ふ。無爲は不生不滅の常樂の法をいふ。即ち時間空間の制約を超えたる寂然たる眞理。

【無作】信解品に出づ。三解脫門の一。解脫を得る三種の方法中空、無相の二門を基として、それによりて更に欲求の思を離るゝこと。

【無明】一切煩惱の源、又その總稱なり。煩惱の爲めに眼くらまされて眞理を見ること能はず。智明かならざるを以て迷ふ。

【無生忍】無生法忍の略なり。その項を見よ。

【無上菩提】菩提は最上無上の法なり、證なり、道なるが故に無上菩提といふ。正覺、涅槃といふに同じ。

【無生法忍】無生の法を證悟する位即ち一切萬有の無生無滅、中道實相なることを悟る位なり忍とは、それを忍可決定するの意なり。

【無上道】無上菩提といふに同じ佛のさとり。

【無上士】梵に阿耨多羅といふ。佛十號の一。佛は世の最上無上の大士なるを以てこの名あり。

【無所畏】畏るゝことなき如來の德之に四を說く。四無所畏を見よ。

【無盡意菩薩】菩薩の名なり。十恒河沙の微塵の世界を過ぎて不眴世界あり。その國に普賢如來と申す佛在す。純ら菩薩のみありて二乘の名もなし。無盡意は彼の中の菩薩なり。

う

【有】まよひのこと。因果相續して生死の流盡きず、歷然として存すること。三有、二十五有の目あり

【優婆夷】佛門に歸せる在家の女をいふ。四部衆の一。近事女等と譯す。

【優婆提舍】十二部經の一。論議經逐分別說と譯す。佛自ら法相を分ち問答論議して法義を明したるものをいふ。

【優婆塞】近事男等と譯す。佛門に歸依せる在家の男子をいふ。四部衆の一なり。

【優婆羅】八大龍王の一。黛色蓮華池と譯す。

【優曇鉢華】優鉢華、穫曇華等と略稱す。義譯して瑞應華、靈瑞華と云ふ。優曇波羅樹の華。三千年に一度花開くといふ。佛天下に在す時この花開くといひ、或はこの花開けば輪王世に出づなどゝいふ。優曇華の咲く靈樹なり。

【優曇波羅】空起、起空と譯す。優

【有頂天】無色界第四天、非想非々想處天の異名。有とは三有のことにて、三界九地の絕頂なるが故にこの名を立つ。

【優樓頻贏迦葉】三迦葉の一人。初めは事火外道にて他の二兄弟と共に在りしが後に弟子を率ゐて佛に歸服せり。

【有餘涅槃】阿羅漢の煩惱を斷じて證果を得れど、なほ異熟の苦果たる肉身を滅する能はざる位の涅槃をいふ。

【有想、無想、非有想非無想】隨喜品による。有想は無色界の第一空處と第二識處。無想は第二無所有處、非有想非無想とは第四非想非々想處をいふ。

【有無の見】有の見と無の見。有の見とは我及び世界の常往實體を主張す、また常見ともいふ。無の見

とは我及び世界の無體不實を主張するものにて、また斷見ともいふ。

【有爲、無爲】有爲とは爲作造作あること。即ち生滅變化を爲す一切現象の世界をいふ。無爲は之に反して因果時空に支配せられざる實體、眞理を指す。

【有形、無形】隨喜品に出づ。欲界色界の兩界の有情は形を有するを以て、有形といひ無色界は無色にて形體存せざるを以てその有情を無形といふ。

ゐ

【韋提希】摩訶陀國王頻婆沙羅の后妃、阿闍世王の生母。略して韋提と呼ぶ。王子阿闍世の爲めに七重の牢獄に幽閉せられたる時、煩惱して佛陀を念じてその說法を請ふ。釋尊、韋提の請を容れて、阿難目連を將ゐる耆闍崛山より沒して夫人の幽閉せらるゝ王宮に降臨し給ひて說法す。觀無量壽經これなり。

【韋陀羅】毗陀羅に同じ。赤色鬼と譯す。

【威音王如來】法華經不輕菩薩品に顯はれたる如來なり。常不輕菩薩はこの如來の滅後の像法中に出世せるなりと。

【威猛大勢之力】涌出品に出づ。佛の未來益物の大勢力をいふ。能く之を障碍するものなきが故に名く。

【威儀】規律に契ひたるふるまひ戒律の異名。

【威神力】威德不可思議なる自在力如來の威力の不可思議なるを稱していふ。

の

【後の五百歲】藥王品に出づ。大集經に如來滅後を五箇の五百年に別つ。第一は解脫堅固の五百年。第二は禪定堅固の五百年。第三は多聞堅固の五百年。第四は造寺堅固の五百年。第五は鬪諍堅固の五百年なり。その中、第五の五百年を後の五百歲といふ。これより末法に入る。

お

【應供】阿羅漢の譯。應受供養の義

にて、悟を開きて人天し供養を受くるに堪ふる德あるが故に名く。又、佛のこと。佛十號の一。

【應化】佛菩薩が衆生救濟の爲めに機根に應じて形を換へて化現すること。

【應化身】應身に同じ、佛三身の一。應化の身。

【應身】三身の一。衆生の機類に應じて娑婆界に現ぜし佛身をいふ。

【音敎】音聲敎法。佛の說法のことなり。

く

【九方】分別品による。東西南北の四方と乾坤巽艮の四維と中央とを云ふ。

【鳩槃荼鬼】陰囊、形卵と譯し、厭眉鬼、冬爪鬼と名く。人の精氣を噉ふ鬼の名。

【廣長舌】三十二相の一。佛の舌は廣く長くして面輪を覆ひ髮際に至る等といふ。佛語の誠實にして虛妄を離るゝことを示す。

【廣大智慧觀】普門品による。空有の二邊に著することなく、中道實相の慧による正觀をいふ。

【光音天】色界十八天の第六。二禪天の第三。この天は光明を以て語音となすが故に名づく。

【光明大梵】第二禪天の梵王なり。

【月天子】月宮殿中に住する天王四大天王に屬して月天を領し、多くの天女を侍らして歡樂を盡し、壽命五百歲なり。

【觀世音】梵語、阿婆盧吉低舍婆羅の譯なり。又光世音、救世淨聖とも云ふ。新譯に觀自在といふ。普陀洛山に居り、常に大慈大悲を以て十方諸國土に身を現じ、世人の其名を稱する音聲を觀じて皆解脫を得しむ。柔和忍辱の相を示し形相の異るによりて六觀音、七觀音三十三觀音の名あり。

【苦諦】四諦の一。過去の惑業によりて現在の苦果を感ず。現世の苦なること及び苦に依つて來る所以を明にし、その誠實不虛の眞理たるをいふ。

【空法】偏眞の空理にして中道ならざる小乘の涅槃を指していふことあり。（譬喩品に於ける如し）又、一切諸法の空なるを觀じて執著を離るゝ法を云ふあり（信解品）

【空王佛】釋尊が三無數劫の因中に

逢ひ給ふ所の一佛なり。

【空解脱門】　三解脱門の一。解脱に到達する空の門。萬法諸法の本性の空なるを知れば、之に對して執著を起さゞるに至り、即ち諸法に於て自在なるを得るが故に、之を解脱門の一に置く。

【箜篌】　坎侯、高濟琴ともいふ。樂器の一種なり。

【久遠】　極めて遠きいにしへのこと

【供養】　佛、法、僧等に香花、燈明衣食其他を供へて回向すること、之れに敬供養、行供養、利供養の三種あり。

【九部の法】　方便品に出づ。釋尊所説の教法の種類を數へて九とす。長行説、重頌説、孤起偈説、因緣説、譬喩説、本事説、本生説、未曾有説、論議説これなり、すべて小乘の法門なり。大乘十二部經に對して小乘を九部の法と名く。

【拘鞞陀羅樹】　樹の名。譯して大遊戯地樹といふ。

【鳩摩羅什】　略して羅什ともいふ童壽と譯す。龜茲國の人。姚秦の弘治三年始めて長安に來り、逍遙園に館し、法華經、大智度論等、經論三百餘卷を譯す。東晋の義熙五年八月二十日長安に寂す。壽七十四。門弟三千人。そのうち道生、道融、僧肇、僧叡を什門の四聖と稱す。

【薫陸】　太秦國に出づる大樹。枝葉古松の如く、盛夏に木膠流出して桃膠の如しといふ。

【群萠】　衆生、群生に同じ。草の芽の萠え出づる如く、迷界に群り生ずるが故に名く。

【群生】　前項に同じ。

や

【影向】　月影の水に宿る如く、佛菩薩が衆生に向ひてその姿を宿し示現すると。

【瓔珞】　印度の貴人、殊に婦人少年などが頭、頸、胸等にかけたる珠玉のかざりなり。菩薩、天女等亦用ゐて以て飾りと爲す。

【藥王菩薩】　二十五時菩薩の一。觀藥王ともいふ。過去世に於て瑠璃光照如來の滅度の後に日藏比丘ありし正法を宣布す。その時星宿光長者とい者あり、弟と共に法を聞き、果實及び藥を比丘に供養す。この長者即ち今の藥王菩薩なりと

いひ、未來に成佛して樓至如來と稱し、或は淨眼佛となるといふ。この菩薩常に大悲を行じ藥術を以て衆生の惑病を治すの自在を有せり。形色端麗にして左手に幢を有てり。

【藥草喩】　法華七喩の一。法華經藥草喩品に出づる三草二木の喩なり

【夜摩天】　又は須夜摩天、焰摩天、焰天と云ふ。夜摩とは善時又は時分と譯す。この天は時々口に快樂を唱ふるが故に名く。欲界六天の第三、空居四天の一。地上十六萬由旬の空中にあり。此天の衆生は身長二由旬、衣の重さ三銖、蓮華の開合を以て晝夜を分つ。壽二千歲。人間の二百歲を以て一日一夜とす。換算すれば十四億四百萬歲なり。

【夜叉】　又は藥叉。勇健、暴惡と譯す。八部鬼衆の一。捷疾鬼ともいふ。天、地、虚空の三夜叉あり、天と虚空との二夜叉は能く飛行すれども地夜叉は飛行する能はずといふ。

【耶輸陀羅】　名聞、華色等と譯す善覺長者の女。釋尊出家の正妃にして羅睺羅の母なり。釋尊成道五年に出家して尼衆の主となる。

ま

【魔】　魔羅の略。殺者、障、惡者と譯す。心身を惱亂し善法を妨げ、功德の財を奪ひ、智慧の命を殺すもの、之に四魔。五魔の目あり。その項を見よ。

【魔尼】　如意珠と譯す。

【摩梵】　天魔と梵王となり。天魔は他化自在天。梵王は大梵天。

【末利華】　花の名。摩利とも書す鬘花といふ。

【摩訶波闍波提】　大生主と譯す。釋尊の生母たる摩耶夫人の姊、釋尊の姨母に當る。後、釋尊の弟子となる、比丘尼の始なり。

【摩訶迦葉】　大飮光、太龜氏と譯す釋尊十大弟子の一。上行第一と稱せらる。本、婆羅門なりしが、釋尊成道三年に歸佛す。佛滅後、衆の上座となり大衆を率ゐて第一結集を爲す。

【摩訶拘絺羅】　大膝と譯す。舍利弗の舅。初め長爪梵士と稱せらる。後佛弟子となり問答第一と稱せらる。

【摩訶曼陀羅華】　大白蓮華と譯す曼

陀羅華の項を見よ。

【摩訶曼殊沙華】大柔輭、大赤團華と譯す。曼殊沙華の項を見よ。

【摩訶薩】摩訶薩埵の略。大有情大覺士と譯す。菩薩の行を行じて衆生を濟度する人。佛を除いて最上人なるが故に大といふなり。

【摩訶目犍連】略して目犍連、又は目連といふ。胡豆、菜茯根、采菽氏等と譯す。釋尊十大弟子の一にて神通第一と稱せらる。もと舍利弗と共に外道に事へしが王舍城に於て歸佛す。

【抹香】沈檀を擣きて粉末となせる香料。

【末法】澆末、末世ともいふ。三時の一。像法に次ぐの時、佛滅千五百年の後なり。佛の遺敎は存すれども之を行するものなく從つて證するものもなしといふ時季り。

【魔王】欲界第六天の主。他化自在天。この天は惡を好みて聖者の成道を妨ぐる故に魔王といふ。

【魍魎】山川木石等の變怪をいふ。

【摩睺羅迦】大蟒神、大腹行と譯す。印度の鬼神、八部衆の一。

【曼陀羅華】適意華、天妙華、白華等と譯す。白色にして妙香あり。見る人皆意に適す。

【曼殊沙華】柔輭小赤團華と譯す。天華の名。色鮮かにして見る者強剛の三業を離るといふ。

け

【偈】偈頌と訓す。經論の中、詩句を以て佛德を讚嘆し法理を叙べたるもの。四種頌全體を總稱するとその中の伽陀のみを呼ぶとの二義あり。

【磬】堅き石を曲形に刻み、つりさげて鳴らす樂器なり。後世にては銅にて作り、佛前禮盤の右側の架にかけて、導師之を鳴らす。

【罽那尸棄佛】また刺那尸棄とも云ふ。寶髻、寶頂と譯す。釋尊因位に於て初僧祇の修行を終り給ひし時に遇ひ給ひし佛。過去七佛中の尸棄佛とは同佛にあらず。

【戯論】謬れる見解。くだらぬ見解愛論見論等の如きをいふ。

【華報】果報の對。現世在において受くる報のこと。來世の果報に對して、結果を結ぶ前華の如きものなるが故に名く。

【繫縛】煩惱等に纏縛せられて、心

身自由を得ざるをいふ。

【結緣】ゆかりをむすぶこと。佛菩薩の世を救はんが爲めに先づ衆生にゆかりをつくること。衆生が修行に先ちて三寶に緣をむすぶこと。

【解脫】煩惱の繫縛を脫し迷界の業苦を離れ、迷を轉じて悟を得、自由自在の身となること。

【解脫相、離相、滅相】藥草喩品に出づ。解脫相とは一切煩惱の繫縛を脫するを云ひ、離相とは一切の業繫を離るゝを云ひ、滅相とは分段生死、變易生死の二死を滅するをいふ。次第の如く惑、業、苦の三道を離脫するをいふ。

【外道】佛敎以外の諸教學をいふ六師外道、九十五種の外道等あり。異端邪說として斥くる意に用ゐらるゝこと多し。

【結】煩惱のこと。心身を結縛して生死界を離れしめざるが故なり。

【結跏趺坐】全跏趺坐とも、或は本跏趺坐ともいふ。左の趾を右の股の上におき、右の趾を左の股の上におきて坐す。

【結經】開經の對にて佛が本經を說き終りて後に結尾として說く經說のこと。法華經の後に說かれたる觀普賢經の如きをいふ。

【結使】心身を縛し驅使する意にて煩惱のことなり。

【化樂天】欲界六欲天の第五。この天に生れたる有情は、自ら五塵の欲を變化して快樂するが故にこの名あり。人壽二百三十億萬歲に當る天壽あり。樂變化天とも名く。

【希有】希にある珍らしきこと。容易に見難き不可思議なること。

【憍梵波提】牛司、牛主と譯す。佛弟子中、解律第一と稱せらる。

【憍曇彌】梵音ゴータミ、明女と譯す。釋尊の姨母。或は釋尊太子たりし時三夫人ありし中の第一と云ひ、或は羅睺羅の母にて耶輸陀羅と同一とするあり。瞿曇を姓とせる女子の通稱歟。

【憍陳如】阿若憍陳如の略。その項を見よ。

【樂說辯才】第三地の菩薩、內智明になりて他人の爲めに好んで辯才を振ふをいふ。樂說は四無礙辯の一なり。

【樂說無礙辯才】衆生の樂欲に從ひて自在に說法する辯才。四無礙辯の一。前項に同じ。

【見】見解、分別のこと。正見、邪

見。二見、四見、十種見、六十二見等。

【慳貪】むさぼりをしむこと。

【見濁】五濁の一。邪見いよ〳〵盛にして正見すたれ行くこと。

【甄迦羅、頻婆羅、阿閦婆】藥王品に出づ。甄迦羅は矜羯羅ともいふ。倶舍五十二數の第十六位の數名。頻波羅は頻跋羅ともいふ。同第十八位の數名。阿閦婆は阿芻婆ともいふ。同第二十位の數名。

【乾達婆】尋光、食光、嗅光等と譯す。帝釋の俗樂神にて、須彌山の南、金剛窟中に居ると云ひ、酒肉を噉はず、唯香のみを食す舊譯に香神といふ。八部衆の一。

【賢劫】現在の劫の名。この賢劫の住劫に千佛或は千五佛出世して世の衆生を救ふ。かく多數の賢人出世するが故に賢劫と名くといへり。

【甄叔迦寶】赤色と譯す。寶珠の名。その色甄叔迦樹に似たるが故にこの名ありと。

【賢聖】小乘の三賢四聖。三賢とは五停心觀位、別相念住位、總相念住位。四聖とは預流果、一來果、不還果、阿羅漢果をいふ。

ふ

【普智尊】普智は正徧智、尊は世尊なり。即ち佛を稱して普智尊と呼ぶ。

【普智天人尊】佛の異稱なること前項に同じ。

【富樓那】富樓那彌多羅尼子の略その項を見よ。

【富樓那彌多羅尼子】滿慈子、滿願子と譯す。佛十大弟子の一。說法第一と稱せらる。佛成道一夏の後、友人耶舍、離垢等と相前後して佛門に歸す。佛滅の時には南方にありて在らず。三藏第一結集には後れて參加せりといふ。

【不退地】菩薩初住の位。この位は實相の一分を證するが故に退轉することなくして必ず成佛す。これこの名ある所以なり。

【不退轉】退轉せざるの義、佛道修行の過程に於て既に得たる功德を退失せざるに至るの義なり。

【富單那】譯して眞餓鬼といふ。熱病を司る。

【付囑】法を授けて、その傳持を囑すること。

【佛】佛陀の略。覺者と譯す。自覺、覺他、覺行窮滿を義とす。十界の最勝尊なり。また、特に釋尊を指して稱す。

【佛法】佛の說き給へる教法。

【佛道】佛所說の教道、佛の指示し給へる道。佛果に證入すべき道。

【佛慧】或は佛智。如來の聖智。

【佛子】菩薩のこと。また佛教を信ずる人。延いて一切衆生の稱ともなれり。

【佛種】成佛すべき種子。佛性に同じ。

【佛乘】衆生をして佛果を證せしむる教乘をいふ。聲聞乘、緣覺乘の佛果に至る能はずと教ゆるに對し、一切衆生みな成佛すべしと教ふ。菩薩乘と同意なり。

【福業】善果福德を得べき因となる諸行業。欲界に於ける善業。

【普光天子】明星子、黃白大士ともいふ。虛空藏の化身にて帝釋の內臣なり。日天に先ちて世界を照し闇を破するの本誓あり。

【普賢菩薩】行願の德を司る大菩薩なり。釋迦佛の右の脇士にして慈悲を司る。文殊と相對して本經にも重要なる位置を占む。

【不分別】安樂行品による。有無の二邊を分別せざる中道の稱なり。

【普門示現】普門品。普は一切に普きをいひ、門は通入の義。種々の身相を示現して一切衆生を普く佛門に通入せしむること。

【布施】六波羅密の一。他人に物を施すこと。布は心の行き渡ること。施は惠むこと。法施、財施、無畏施の別あり。

【分身】佛菩薩が衆生化益の爲めに身を分ちて化現し給ふ。その化現の佛身を分身といふ。

こ

【五波羅密】六波羅密•即ち布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の中より第六の智慧波羅密を除きていふ。

【五濁】劫濁、見濁、煩惱、衆生濁、命濁の五を云ふ。末代惡世にはこの五のにごり盛なり。

【五欲】色、聲、香、味、觸の五境が五情の欲の對境なるが故に五欲と名く。又、財欲、色欲、飲食欲、名欲、睡眠欲の五を指していふ。

【牛頭栴檀】又は牛首栴檀。印度牛

頭山に多く生ずるを以てこの名あり。又赤檀ともいふ。香氣辟香に似たる香樹の名。また輿藥と意譯す。樹は白楊に似て質凉冷、蛇多く之に附く。その地中にある時は芽莖枝葉竹筍の如し。人之を身に塗れば火坑に入るも燒かるゝことなく、又風瞳を去る。諸天の修羅と戰ふ時之を塗れば、その創傷忽ちに癒ゆといふ。

【好】相好と熟す。すがた。相の微細なるものにて、相に隨伴するものをいふ。隨形好。

【恒河】印度の東北に流るゝ大河ガンヂス河に同じ。雪山に源を發し、無數の衆流を合して滔滔流るゝこと五百里。ブラマプートラ河と共に印度洋に注ぐ。印度古代文明はみなこの恒河流域の地に生れたるなり。

【恒河沙】恒河沙數の略。恒河の沙ほどの數の義にて無量無邊の數をあらはす。

【恒沙】恒河沙の略。前項を見よ。

【五陰魔】色、受、想、行、識の五陰より成る吾人の心身が却つて心身を繫縛しその平和を擾亂する惡魔なるが故に心身を指して五陰魔といふ。

【黑山】藥王品による。南閻浮提の三處にある三重の黑山。

【黑齒】陀羅尼品に出づ。十羅刹女の一。また施黑ともいふ。

【曲齒】陀羅尼品に出づ。十羅利女の一。また施積ともいふ。

【劫】劫波の略。長時と譯す。方高四十里の石を天人が重さ三銖の天衣を以て三年に一回拂拭しかくしてその石の盡くるを一劫とすと。或は人壽十歲の時より百年に一歲を增して八萬四千歲に至り、次に八萬四千歲より百年に一歲つゝ減じて十歲に至るこの一增減を一劫とすと。その他にも解あり。これ一小劫にて二十小劫を一中劫と云ひ、成、住、懷、空の四中劫を合して一大劫といふ。

【業】身口意にあらはるゝ所作をすべて業といふ。又、特に惡業を業と云ふ。蓋し人間の身口意にあらはるゝところ、すべて煩惱の所作にあらざるなきを以てなり。

【業報】業果と云ふと同じ。業によりて招く果報をいふ。現在の心身所作みな過去の業の報ならざるなく、現在の業またその報を引く。

【劫濁】五濁の一。饑饉、疾疫、刀

兵等起りて世の濁亂するをいふ。

【業緣】苦樂の果報を招くべき原因となる業。

【劫燒】大の三災の一。成、住、壞、空の四劫の中壞劫の末に大火起りて初禪天以下盡く燒き盡さるゝを云いふ。

【劫賓那】房宿と譯す。憍薩羅國の人にして釋尊の弟子となる、星宿の事に通ずること衆僧中第一と稱せらる。

【居士】佛門に歸しながら在家せる男を云ふ。

【五衆】譬喩品に出づ。五蘊の舊譯。五陰と同じ色、受、想、行、識の五法といふ。この五、集りて現身を形成す。

【五障】いつゝのさわり。五礙ともいふ。女の身に特にこの五障ありといふ。即ち轉輪聖王となるを得ず梵天王となるを得ず、帝釋となるを得ず、魔王となるを得ず、佛となることを得ず、の五をいふ。

【五情】五欲に同じ。眼、耳、鼻、舌、身の五根より發し、五境に對して起す欲情をいふ。

【五種の不男】男にして男根の不具なるに五種ありと立つ。生(生來具せざるもの)、犍(刑せられたるもの)、妬(男女二根ありて緣によりて互に妬むもの)、變(二根時を經て變ずるもの)、半(半月每に變更するもの)の五をいふ。

【五神通】天眼、天耳、他心、神足、宿命の五通をいふ。漏盡通を加ふれば六神通なり。

【五比丘】阿若憍陳如、頞鞞、跋提、十力迦葉、拘利の五人、佛最初の弟子なり、之を五比丘といふ。

【護世者】四天王をいふ。四天王は世間の守護を任とするが故なり。

【根】根性、根機と熟し、人々の性の向ふところを示す。利根、鈍根の語の如し。また增上の義にて强き作用を有するもの、信、勤、念定、慧を五根といふ如し。

【根力】五根と五力となり。即ち信進、念、定、慧の強き作用を有するを以て根と云ひ力といふ。

【金剛山】閻浮提の南にあり。鐵圍山に同じ。

【金刹】授記品に出づ。刹は掣多羅に同じく幡竿のことなり。塔上九輪の頭部に建つ。金刹は黃金にて造れる旗竿なり。

え

【依報】正報の對。山河、大地、衣服、居宅、飲食等有情の所依となるもの。

【衣鉢】三衣一鉢。袈裟と應量器。

【衣裓】衣襟ともいふ。華を盛る器。貴人に上る。

【衣、座、室】如來の衣、如來の座、如來の室をいふ。衣とは柔和忍辱の心なり、座とは一切法空三昧なり、室とは大慈悲なり、この三によりて廣く四衆の爲めに說法すと。

【衣珠喩】法華七喩の一。五百弟子授記品に出づる寶珠を衣裏に有しながら知らずして貧里に迷ふの喩をいふ。

【緣覺】又は獨覺ともいふ。飛花落葉により十二因緣を觀じて無師獨悟する聖者なり。二乘、三乘の一。

【閻浮提】須彌四州の一。穢洲、穢樹城、勝金洲、好金土等と譯す。須彌山の南方に位し、十六の大國、五百の中國、十萬の小國あり。地形南狹北長にして縱橫七千由旬、人面また地形に像り、身長三肘半、或は四肘。人壽百歲なれど中夭の者多し。樂は東北二洲に劣ると雖、佛に遇ひ法を聞くことに於て本洲を第一とす。諸佛は唯この洲にのみ出現すといふ。もと印度のことに名けたるもの、後に吾人の住する世界の意となれり。

【閻浮檀金】閻浮樹の下を流るゝ河の中に生ずる沙金の稱なり。

【閻浮那提金光如來】迦旃延尊者の未來成佛せん時の佛名なり。閻浮は樹名。那樹は河の義。この河中より勝金を出す、閻浮那陀金といふ。閻浮河金光如來の義なり。

て

【鐵圍山】梵語に斫迦羅といひ、輪山と譯す。九山中の第九。持邊山を環る。須彌の最外邊を圍れる山なり。

【調達】提婆達多に同じ。その項を見よ。

【調伏】衆生身口意の三業を調和して煩惱を制伏すること。

【調御丈夫】佛十號の一。梵名、富樓沙曇藐婆羅提の譯。また丈夫調御者ともいふ。如來は大丈夫の力用を具して衆生を調御制伏して迷

を離れて涅槃を開かしむるが故なり。

【天】梵に提婆といふ。六道の一。欲界、色界、無色界の諸天、並にその住者をいふ。

【天人師】佛十號の一。梵名、提婆摩。賒舍多の譯。佛は正法を以て人天を敎へ導くが故なり。佛は六道の師なりと雖、特に人と天とは能くその道に入りて益を受くるが故なり。

【天中天】佛の尊稱、天中の最上天なるが故に佛を天中天と名く。

【天龍八部】天龍等の八部なり。即ち天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽の八を云ふ。

【轉輪王】轉輪聖王の略。その項を見よ。

【轉輪聖王】梵名、斫迦羅伐辣底曷羅闍。轉輪王、輪王等とも稱す。須彌四州を統領する王にて王位に即く時に感得する輪寶の種別によりて、金輪王、銀輪王、銅輪王、鐵輪王の四王の別あり輪寶を轉じて一切を威服するが故に名あり。人壽無量歲の時より八萬歲の時まで娑婆世界に出現せりといふ。

【天王如來】提婆達多授記作佛の佛名なり。

【天大將軍】諸天を侍衛する將軍。

【天の樹王】序品に出づ。忉利天の波利質多樹。一切樹木の王と稱せらる。

【天鼓】忉利天の善法堂の前にある大鼓なり。又、天界の伎樂器怨來、怨去、愛欲、生厭の四種の聲を出し、叩かざれども自然に鳴るといふ。

【天眼】五眼の一。禪定によりて得たる眼。天中の淨色を體とし明了自由によく三千界乃至十方界を見る。之に修得、生得、呪得の別あり。

【天衣】天人の身につくる衣をいふ。あまの羽衣のこと。

あ

【愛別離苦】四苦又は八苦の一。愛する者と別れ離るゝの苦痛をいふ。

【阿逸多】阿迭多、阿耆多、等と云ふ。略して阿逸。無能勝と譯す。彌勒菩薩の字なり。彌勒菩薩の項を見よ。

【愛樂】愛しれがひもとむること信

愛欲樂の義。法を愛し道を求むる修道上の樂欲をいふ。

【愛語】人をして親愛の心を生ぜしむる言葉をいふ。隨意愛語、隨行愛語の別あり。

【阿若憍陳如】五比丘の一人。釋尊出家の際、父王の命によりて太子の後を追ひ共に苦行せるが後、太子を捨てゝ行く。釋尊成道せらるゝや第一に憍陳如等の五人を敎化して弟子とす。中印度迦毘羅衛城の人にして婆羅門族たり。

【阿梨樹】蘭香蒴と譯す。印度の熱帶地に産する植物。この木の枝地に墮つれば破れて七分すといふ。

【阿㝹樓䭾】無滅、如意、無貪と譯す。佛十大弟子の一人。天眼第一と稱せらる。釋尊の從弟なり。

【阿迦尼吒】略して尼師吒、尼吒ともいふ。色究竟と譯す。色界十八天中、最上の世界の名。

【阿提目多伽】龍華舐と譯す。草の名なり。大麻の如くにして青葉赤花あり。實は油となすべしと。

【阿僧祇】梵音アサンクフヤ。又阿僧企耶とも書す。無數、無央數と譯す。印度の數名なり。

【阿那婆達多】無熱と譯す。八大龍王の一。

【阿那含】不來、不還と譯す。聲聞四果の一。欲界思惑の九品を斷盡したる聖者をいふ。

【阿難】阿難陀の略。歡喜、慶喜無染と譯す。釋尊十大弟子の一人。佛の從弟にして二十餘年間佛に常に隨從し、多聞第一と稱せらる。佛滅後、畢波羅窟に於て第一結集を爲す時、修多羅藏を誦出せり。

【阿練若】阿蘭若、又は蘭若とも云ふ。遠離處、又は閑靜處等と譯す。閑靜にして定を修するに適する比丘の住處をいふ。

【阿羅訶】譯して應供といふ。佛の別號なり。

【阿羅漢】應供、殺賊、無生、離惡等と譯す。聲聞四果の一、その究竟位、又佛名にも用ゆ。

【阿耨多羅三藐三菩提】無上正徧智無上正眞道と云ふ。無上菩提といふに同じ。佛は覺智圓滿して宇宙の眞理知らざることなく、無上正徧の聖者をその體とするが故なり。

【惡知識】善知識に對す。邪惡の法を說きて人を惡道に導くものをいふ。

【惡律儀】律儀は制定せられたる起居作法威儀をいふ。之に善と惡とあり。惡律儀は惡戒に同じ。

【惡業】善業の對。身口意の三業の動作中、殺生、偷盜等の惡果を招くべき不善の業を云ふ。

【阿彌陀佛】無量壽、無量光と譯す。西方極樂世界の敎主あり。此の阿彌陀佛の大無量壽經の四十八願の敎主たる彌陀に非ず、故に妙樂大師も「更に觀經等を指すを須ゐず」と說かれたり。今法華經に開會せられたる彌陀は迹門には法華修行法華說法の彌陀なり。本門には釋尊分身の彌陀なり。

【足に油を塗る】信解品に見ゆ。風患を豫防する方法にて、印度の風習なり。油はまた香油類なりとも稱す。

【阿閦】阿閦鞞、阿閦婆の略。不動、無動、無怒、無瞋恚と譯す、過去に大日如來の所に發願し、修行して東方に成佛せる佛の御名なり。その土を善快と名く。

【阿修羅】略して修羅ともいふ。十界、六道の一にて非天、非類不端正等と譯す。衆相山中、又は大海の底に居りて常に三十三天と戰ふ天趣の類なりといふ。

【阿闍世】未生怨と譯す。摩訶陀國王頻婆沙羅の太子にして、韋提希夫人の生む所なり。提婆達多に唆かされて父王を弑し母を幽し佛に敵す等の逆罪を犯す。後に慙愧歸佛して敎檀の大施主となる。

【阿私仙】阿私陀仙の略。釋尊出誕の際にその尊容を相して豫言せし婆羅門の學者（仙人）なりと云ひ、又、提婆達多の過去世の名としても知らる。無比、端正等と譯す。

【阿鼻】阿鼻旨の略。無間と譯す地獄の名。

【阿鼻地獄】所謂無間地獄なり。八熱地獄の最下にあり。墮獄の人、苦を受くること間なきを以てこの名を得たり。五逆謗法の罪人この地獄に墮す。

【阿鞞跋致】阿惟越致とも書す。不退、無退等と譯す。菩薩修行してある位に至れば、凡下に退することなきに至る、その位をいふ。

【安樂世界】極樂の異名。佛の淨土が諸苦を離れたる安穩快樂の世界なるが故にこの名あり。

さ

【濟度】すくひわたすこと、衆生を

苦海より濟ひて涅槃の岸へ渡すことをいふ。

【在家】出家に對す。妻子恩愛の纒はる俗世間の家に居ること。

【罪福の相】提婆品による。罪福とは十界迷悟の法。六道輪廻の衆生を罪といひ、四聖斷形の聖者を福といふ。通俗に善惡苦樂の相といふに同じ。

【最正覺】佛のさとりを指す。無上菩提に同じ。

【最上乘】佛乘を指す。一切の敎乘中、最上なるを以てこの名を立つ。藥草喩品に出づ。

【相】形相、相狀。すがた。外より見るべきもの、佛の相好中、大にして顯はるゝものを相といふ。

【像法】三時の一。正法五百年の後に次ぐ。佛の遺敎と之によりて行ずる人はあれども、實の如く證するもののなき時期なり。像は像似の義にて正法に似たるの意なり。

【坐禪】禪は禪那にて靜慮と譯す定に入るなり。坐禪とは靜坐して心を三昧に住せしめ、以て安樂自在の境界に入らしむること。

【三寶】佛寶、法寶、僧寶の三を云ふ。之に大乘、小乘、別體、同體住持の三寶あり。

【三毒】貪、瞋、癡の三煩惱をいふ善根を害毒する根本煩惱なるを以てなり。

【三界】欲界、色界、無色界の三をいふ。欲界とは第六天までの天、及び人間以下の五趣にて、食欲、色欲、睡眠欲等熾烈なるを以て名く色界とは五欲なき清淨の肉體の存する天界をいひ。無色界とは身なくして心のみ存する天界をいふ。

【三苦】苦苦、壞苦、行苦の三をいふ。苦苦とは疾病、飢餓等の苦緣より生ずる心身の苦惱を云ひ、壞苦とは自己の所著の境界の破滅する時に受くる苦惱をいひ、行苦とは世の無常轉變なるより受くる苦惱をいふ。

【三昧】三摩地ともいふ。定と譯す心を一境に注ぎ、純一なる精神活動に入るをいふ。空、無相、無願之を三三昧といふ。

【三惡道】地獄、餓鬼、畜生の三道をいふ。之に修羅と人間と天上とを加へて六道といふ。

【三藏】經、律、論の三をいふ。またこの三に精通したる人をいふ。藏とは一切の文義また敎理を藏む

るの義。

【三明】また三達ともいふ。阿羅漢、佛、菩薩等の聖者の具する三種の智明なり。一、宿住智證明は過去のことに通達す。死生智證明は未來のことに明らかなり。漏盡智證明は現在のことに通達す。この三を三明といふ。また六神通の中宿命、天眼、漏盡の三特稱。

【三藐三佛陀】佛の別號。譯して正偏知といふ。一切諸法の眞理に偏く通達すること。

【三十二相】現身佛の相好、重なるもの三十二を數ふ。即ち、足定平、千輻輪、手指纖長、手足柔軟、手足縵網、足跟滿足、足趺高好、腨如鹿王、手過膝、馬陰藏、身縱廣、毛孔生青色、身毛上靡、身金色、身光面各一丈、皮膚細滑、七處平滿、兩腋滿、身如師子、身端嚴、肩圓滿、四十齒、齒白齊密、四牙白淨、頰車如師子、咽中津液得上味、廣長舌、梵音深遠、眼色如金精、眼睫如牛王、眉間白毫、頂肉髻成これなり。

【三十三天】忉利天のこと。即ち善法堂天、山峰天、山頂天、喜見城天、鉢私他天、倶吒天、雜殿天、懽喜園天、光明天、波利耶多天、離險岸天、谷崖岸天、摩尼藏天、旃行天、金殿天、鬘形天、柔軟天、雜莊嚴天、如意天、微細行天、歌音喜樂天、威德輪天、日行天、閻摩那娑羅天、連行天、影照天、智慧行天、衆分天、曼陀羅天、上行天、威德顏天、威德燄輪光天、清淨天これなり。

【三乘】乘は運載の義。敎乘、法門のこと。聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘の三を三乘といふ。

【三千界】【三千大千界】三千大千世界の略。

【三千大千世界】一世界即ち日月、須彌山、四天下、四王天、三十三天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天、梵世天を千箇合したるものを小千世界と云ひ、小千世界を千箇合したるものを中千世界と云ひ、中千世界を千箇合したるものを大千世界と云ふ。この小千、中千、大千の世界を總稱して、三千大千世界といふ。又、大千世界を三千合したるものゝ稱とするあり。

き

【記】記莂の略。佛が修行者に對し

て、未來如何なる證果を得べきかを豫め說示し給ふこと。

【祇夜】應頌、重頌と譯す。十二部の一。初め長行にて說けるところを重ねて偈頌を以て記す、その頌文を云ふ。偈といへる孤起頌に對す。

【經】三藏の一。梵に修多羅、貫通の義なり。佛の說き給へる敎法及び之を記せる敎文をいふ。一切の理義を貫通して散佚せざらしむるなり。經とは修多羅の義譯なり。

【膠香】藥王品に出づ。楓樹の香脂をいふ。

【經行】行道ともいふ。一定の場所をめぐり步くこと、坐禪中、睡眠を防がん爲め、又は運動の爲めに之を行ふ。

【行業】衆生各々そのところに従うて爲す業事。

【行處、親近處】安樂行品に出づ行者既に理に入りて之を履行するを行處と云ひ、まだ理に入らざれど親しみ近づくを親近處と名く。

【逆路伽耶陀】逆世とも譯す。世情に反する敎を立つるをいふ。

【佉羅騫駄】四阿修羅王の一にて本經の聽衆なり。

【鬼子母】梵名、訶利帝。歡喜母愛子母とも云ふ。大夜叉女神の名、初め千子ありしが、暴惡にして他人の兒を奪ひ來りて食ふ、佛之を誡めんとて、千子の一人を隱し給ふ。その時より改悔して五戒を受け正法に歸し、佛法及び童男童女の守護となる。

【耆闍崛山】靈鷲山と譯す。その項を見よ。本經所說の地なり。

【吉蔗】所作と譯す。起尸鬼なり。

【緊那羅】疑人、人非人、疑神と譯す。八部衆の一。帝釋に仕へて法樂を奏する神なり。

ゆ

【遊戲神通】菩薩の神通を現ずるに自在なることを遊戲に喩へて云ふ。衆生を濟度するは園林に遊戲するが如しとなり。

【踊躍】喜び餘りて踊り上るをいふ。天におどるを踊といひ、地におどるを躍といふと。

【由旬】踰闍那、踰繕那に同じ。印度の里數をあらはす名にして八俱盧舍を一由旬とす。清里四十里又は三十里に當ると。或は大由旬は

八十里、中由旬は六十里、小由旬は四十里ともいふ。

め

【滅度】煩惱を滅して生死の苦海を度ること。涅槃の譯語なり。その項を見よ。

【滅諦】四諦の一。無漏道を修するに因りて三界有漏の因果を全く滅盡することを得ること。即ち無漏道所得の果なり。涅槃に同じ。

【碼碯】梵名、阿濕縛揭婆。寶石の一にて七寶の一に數へらる。或說に赤斕紅色にて馬の腦に似るが故に名づくとあり。

【妙法堂】法師品に出づ。善法堂に同じ。忉利天の西南角にあり、三十三天こゝに集りて、如法不如法の事を論議すといふ。

【妙法蓮華】本經の題目にて梵本に薩達磨芬陀利迦とあるを譯せしなり。十界、十如、權實の諸法即ち現實の宇宙人生の事象がそのまゝに絕對平等の眞理にして一色一香の諸法みな中道ならざるなしといふ眞理、之を妙法といふ。蓮華とはその妙法を喩へたるにて、蓮の華と俱に實あり、華開き實現ばるゝ所、迷悟、因果、自他、依正等の一切不二なるをあらはすに最も適當なるを以て蓮華を以て妙法に喩ふ。所謂法喩兼存の題號なり。

【妙法蓮華、敎菩薩法、佛所護念】法華經の十七異名の內、その三名なり。

【妙音菩薩】一切淨光莊嚴國の菩薩。智慧深遠にして無量の三昧を得、身長四萬二千由旬、相好殊妙なり。三十四身を現じて衆生の爲めに說法すとこふ。八萬四千の菩薩に圍繞せられて靈山會上の釋尊の御許に來りて供養せること、妙音品に見ゆ。

み

【彌勒菩薩】又は梅怛麗耶。慈氏と譯す。姓は阿逸多。無能勝と譯す。南天竺の婆羅門にして兜率天に上生す。現にその內院にあり。當來に此土に出興して釋迦佛の處を補ひ、賢劫千佛中の第五佛となる。故に之を補處の彌勒といふ。その出世は佛滅後五十六億七千萬年の後なり。

【彌樓山】 地持と譯す。須彌山を圍れる七金山の一なり。

【未曾有】 未だ曾てなかりし勝事珍事をいふ。

【密行】 人記品に出づ。嚴正に戒を持し、精密に威儀を行ずるの意に解するを通例とすれど、今の義は特殊の意にて、もと圓頓究竟の證を得たる身が、しばらく本地を秘して小乘の修行を爲すをいふ。すなはち本地の圓妙を秘して行ずるが故に密行といふ。

【命濁】 五濁の一。末代に及びて人壽短くなりて、長命を保つものなきに至るを云ふ。

【名利】 名聞即ち名譽を好むことと、利養即ち利欲を貪ること。

【明月天子】 略して月天子ともいふ。月宮殿に在りて月世界を統治する大王、帝釋の內臣なり。

【明行足】 梵名、鞞多遮羅那三般那、佛十號の一。佛は明行を圓滿に具足するが故に名づく。

【命命】 法師品に出づ梵名を耆婆耆婆と云ひ、共命・生々等の譯あり鳥の名にて、一身兩頭にして雪山に棲むといふ。

【名字の羅漢】 安樂行品に出づ。名のみありて實なき羅漢をいふ。

し

【四法】 安樂行品に出づ。身、口、意、誓願の四安樂行のこと。

【七寶】 金、銀、瑠璃、硨磲、碼碯、珊瑚、琥珀の稱。その他にも種々の説あり。

【七寶の千子】 法師品に出づ。轉輪聖王の感得せる寶女。王の千子を生むといふよりこの稱あり。

【七珍】 七寶に同じ。その項を見よ。

【七佛】 毗婆尸佛、尸棄佛、毗舍浮佛、拘留孫佛、倶那含牟尼佛、迦葉佛、釋迦牟尼佛。普通に過去の七佛といふ。前三佛は過去莊嚴劫の佛。後の四は現在賢劫中の佛なり。

【諸法如實相】 安樂行品に出づ。諸法實相に同じ。

【諸法實相】 一切諸法の眞實相。諸法は差別のまゝながら平等絶對の眞理なりといふこと。これ法華經所説の根本義なり。

【諸根】 方便品に出づ。通例は眼、耳、鼻、舌、身の六根のことなれど、今は信、進、念、定、慧の五根を指す。

【諸園】 法師品に出づ。忉利天喜見城外の四面にありといふ衆車、麁惡、雜林、喜林の四園。

【諸釋の法王】 授記品に出づ。釋尊の敬稱。釋尊は諸多の釋迦種より作佛せられし無上人なるが故なり。

【諸仙の導師】 序品に出づ。仙は婆羅門行者のこと。佛は彼等を化導する師主なるが故に佛の稱とす。

【除斷】 衆生の疑悔を除斷するなり。

【四諦】 苦、集、滅、道の四諦をいふ。苦、集の二諦は現在迷界の因果を明せるものにて、現在の苦果は煩惱の集諦によることを明らめ、之によりて悟界の因果たる滅道二諦を得。即ち無漏道によりて煩惱を斷盡して滅諦の果を得るなり。

【四大】 地、水、火、風の四大種をいふ。この四がこの世界の形體を構成する四原質なりといふなり。

【四大天王】 護世四天王、また單に四天王ともいふ。帝釋の外臣にて、東方の持國天、西方の廣目天、南方の增長天、北方の多聞天の四なり。四方を護持管領せり。

【斯陀含】 一往來果、略して一來果と譯す。聲聞四果の一。欲界修惑の九品の中、上六品を斷じたる聖者をいふ。

【實、虛、如、異】 壽量品に出づ實とは涅槃の堅實不妄なるを云ひ、虛とは生死の無常なるをいひ、如とは眞諦空如の義、二乘の證果をいひ、異とは差別の義にて世間凡夫の相をいふ。

【實智】 權智に對す。佛の知見をいふ。

【實道】 眞實の道、即ち圓教一乘なり。

【濕生】 四生の一。蛆蟲の如く濕地によりて生ずるものをいふ。

【尸羅波羅密】 六波羅密の一。持戒到彼岸と譯す。戒律を持することが菩薩の六度の行たりといふなり。

【四無礙智】 説法に自在なる四種の智辯。諸法の名を分別する法、無礙智、諸法の義を分別する義無礙智、衆生に聞かしむる言辭の滯りなき辭無礙智、衆生の根性及びその樂ふところを知りて説法滯りなき樂説無礙智これなり。

【四無所畏】 一切智、漏盡、説障道、

說盡苦道の四無所畏。如來の德をあらはす語。

【娑婆】堪忍、忍土、忍界と譯す種々の苦痛を忍ばざるべからざる世界の義、この世のこと。

【舍利】身骨、體、骨分等と譯す佛又は聖者の遺骨をいふ。

【舍利弗】舊譯に身子。新譯に鶖鷺子といふ。釋尊十大弟子の一人にて智慧第一と稱せらる。もと目連と共に沙然と云ふ外道に仕へしが、佛成道後共に歸佛す。法王子と稱せられ重せられたりしが、佛に先ちて入滅す。

【莎迦陀】善來と譯す。釋尊の弟子なり。

【娑竭羅】海と譯す、八大龍王の一。常に鹹海に居るといふ。

【娑迦羅】沙竭羅に同じ。

【釋迦牟尼】釋尊のこと。釋迦は姓にして能仁と譯し、牟尼は尊稱にて寂默と譯す。また聖賢の義なり。釋迦種より出でたる聖者の意なり。

【釋迦文】釋迦牟尼に同じ。その項を見よ。

【闍提華】花の名。譯して金錢華といふ。

【生、老、病、死】生る、老いる、病む、死す。これを有情の四相といふ。

【正法】譬喩品に出づ。佛滅後五百年に至る間は、遺敎の如く修行して佛果を證するものある時期なり。即ちこの敎行證の三具足する時期を正法といふ。三時の一なり。

【正偏知】三藐三佛陀の譯。佛十號の一。佛は徧ねく眞理を究め盡くして知らざるなきが故に名くるなり。

【淨道】序品に出づ。六度の淨行をいふ。

【唱導】法を唱へて他を導くこと。

【常住一相】安樂行品に出づ。諸法實相に同じ。

【上中下の法】安樂行品に出づ。菩薩、緣覺、聲聞の三乘の法をいふ。

【正定聚】三定聚の一。行法退轉することなく、必ず佛果に至るに定りたる聖者をいふ。

【正覺】正しきさとり。佛のさとり。

【誠諦】眞理といふに同じ。誠は忠誠、物を欺かざるの意。諦は審實、即ち言葉眞に諦るの意。

【常不輕菩薩】菩薩の名。この菩薩比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷等の人々を見る每に禮拜恭敬して我れ汝等を敬ひて敢て輕んぜず、汝等は當に菩薩道を行じて皆佛となるべしと唱へて授記し、人々この言を侮辱の語として刀杖瓦礫を以て打擲すれども廢せざりしによりこの名を得たりといふ。

【莊嚴】かざり。佛身佛土等の嚴麗にかざられたる求正莊嚴の如きをいふ。また佛前に於ける香華等の裝飾をもいふ。

【生緣】化城喩品による。物の生ずべき由緣。

【上行菩薩】菩薩の名。釋尊常不輕品を說き終り、法華經の功德を說きて娑婆世界に弘通すべきことを付囑したまへる菩薩。

【精舍】精盧ともいふ。智德を精練する修道者の居住する舍宅。寺の異稱となる。

【清淨觀】普門品による。觀念の無垢澄淨なるをいふ。

【清淨の眼】信解品に出づ。佛の知見のこと。

【成熟者】信解品による。成熟は充足の意にて、宿善の純熟せるものをいふ。

【聖主天中天】化城喩品に出づ。佛の尊稱なり。佛は極果の聖人なれば聖主と云ひ、又、人の尊ぶ天の更にまた尊ぶところなれば天中天といふ。

【聖主師子】佛の異稱。

【聖師子】佛の異稱。佛は聖法の王なるが故に師子に喩へていふなり。

【精進】六波羅蜜の一。心を專精にして道に勇み進むをいふ。以て彼岸に至る。

【清信の士女】在家の信者の男女、優婆塞、優婆夷をいふ。

【釋梵】釋は忉利天主の帝釋。梵は色界初禪天主大梵天王。

【釋提桓因】具には釋迦提桓因陀羅といふ。能天主と譯す。帝釋に同じ。その項を見よ。

【寂滅】涅槃の譯。その項を見よ。

【寂滅の法】序品に出づ。諸法實相の理をいふ。諸法實相は言語道斷心行所滅なれば寂滅といふ。

【釋種】釋迦種族のこと。

【赤栴檀】略して赤檀ともいふ。香樹の名。牛頭栴檀に同じ。

【邪慢】四慢、七慢の一。自ら德無きに有りと思ひ、邪見に著して三寶を敬せざること。

【邪見】因果の道理を無視する妄見。或は正理に違したる一切の妄

見を云ふ。五見の一。十惡の一に數へらる。

【邪見の稠林】方便品に出づ。邪見に種々ありて交互錯綜せる樣を稠林に喩ふ。

【硨磲】牟婆羅揭婆の譯。一說に海中の大貝にして背上に壟文ありて車輪の如し故に名くと。七寶の一に數へらる。

【沙彌】息慈、勤策男と譯す。七衆の一。沙彌尼に對す。惡を息めて善事を勤修する男子の出家にして、まだ修行の熟せざるものをいふ。

【沙門】桑門とも書す。勤息、止息と譯す。衆善を勤修し、諸惡を止息するの義。出家して佛道を修するものゝ總稱。

【死覺】四覺の一。死のこと。修行の人、死に遇へば修道を續くる能はざるが故なり。

【紫磨金】紫金ともいふ。紫色を帶びたる金、閻浮檀金のこと。

【示、教、利、喜】四事といふ。示は教を示すこと。教は教ふること。利は利益すること。喜は讚嘆して喜ばしむること。

【十六王子】化城喩品に出づ。大通智勝佛在家の時、十六人の王子あり。後みな出家成佛せり。即ち阿閦佛、須彌頂佛、師子音佛、師子根佛、虛空住佛、常滅佛、帝相佛、梵相佛、阿彌陀佛、度一切世間苦惱佛、多摩羅跋旃檀香神通佛、須彌相佛、雲自在佛、雲自在王佛、壞一切世間怖畏佛、釋迦牟尼佛、これなり。

【十方】十の方位。東、西、南、北、乾、坤、巽、艮、上、下の十方。

【十寶山】雪山、香山、阿梨羅山。仙聖山、由乾陀山、馬耳山、尼民陀羅山、斫迦羅山、宿慧山、須彌山の稱。

【十八不共】佛の有し給ふ十八種の獨特の法。即ち身無失、口無失、念無失、無異想、無不定心、無不知已捨、欲無滅、精進無滅、念無滅、慧無滅、解脫無滅、解脫知見無滅、一切身業隨智慧行、一切口業隨智慧行、一切意業隨智慧行、智慧知過去世無礙、智慧知未來世無礙、智慧知現在世、無礙、これなり。

【十二因緣】十二緣起ともいふ。三界の迷の因果を十二に分ちて衆生輪廻のさまを示したるもの無明、(煩惱)、行(善惡の果を得べき所作)、識(意識)、名色(肉身)、六入(六根)、觸(觸覺の欲)、受(感受)

愛(貪愛)、取(取求)、有(善惡の諸業)、生、老死の十二相續緣起すと說く法門。

【十二部經】聖典の說示の樣式によりて十二種に分ちたるもの。長行說、重頌說、授記說、孤起偈說、無問自說、因緣說、譬喩說、本事說、本生說、方廣說、未曾有說、論議說、これなり。

【十力】佛の有し給ふ十種の力能即ち知是處非處智、知三世業報智、知諸禪解脫三昧智、知諸根勝劣智、知種種解智、知種種界智、知一切至所道智、知天限無礙智、知宿命無漏智、知永斷習氣智の十力をいふ。

【思佛】不輕品に出づ。善逝思ともいふ。五百の優婆塞の一。

【十羅刹女】藍婆、毗藍婆、曲齒、華齒、黑齒、多髮、無厭足、持瓔珞、皐諦、奪一切衆生精氣の十をいふ。

【執金剛力】執金剛力士、露形神ともいふ。佛法を守護する神。

【四部衆】佛弟子の四種。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四をいふ。四衆ともいふ。

【四天王宮】持國、增長、廣目、多聞の四天王の宮殿をいふ。

【四天下】須彌山の四方にある四世界のこと。東弗婆提、西瞿耶尼、南閻浮提、北俱盧洲これなり。

【四惡道】地獄、餓鬼、畜生、脩羅をいふ。

【自在天】欲界の頂、欲界の天主大魔王の住する處。他人の變化する樂事をかりて己が樂とするゆゑに他化自在天ともいふ。

【自在神通之力】涌出品に出づ。佛の法身は長にあらず短にあらず、而もよく長短ありて機に適ふが故にこの名あり。

【色力】化城喩品に見ゆ。顏色氣力なり。

【尸棄大梵】色界初禪天の主、大梵天王の名なり。尸棄は有髻或は火首と譯す。

【色、聲、香、味、觸】これを五境、五欲、五塵と云ふ。眼、耳、鼻、舌身の對境となりて常に衆生の欲を誘起し、衆生の心を汚染す。

【呪】陀羅尼のことなり。呪はもと支那固有の名稱にして秘密語の稱たりしが、陀羅尼の用と似たるより義譯せるなり。

【須菩提】善吉と譯す。佛十大弟子

の一人にて、解空第一と稱せらるゝ

【受持】　敎を受けて明記して失はざること。

【衆中の糟糠】　方便品に出づ。比丘比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆の中、破戒無慚なるものをいふ。

【周陀】　周利槃陀加の略。淨路邊生と譯す。釋尊の弟子なり。性晉鈍にして自己の名をも記する能はざりしが、而も遂に阿羅漢果を證せりと。

【修多羅】　契經と譯す。經に同じ又契經中の直ちに法義を說ける長行の文のみを指すことあり。この時は法本と義譯す。

【須陀洹】　預流、入流、逆流と譯す聲聞四果の一。三果の見惑を斷盡し、始めて聖者の流類に預り入りし位。

【取相の凡夫】　信解品に出づ。差別の事相に執著せる迷ひの凡夫といふ意なり。

【種、相、體、性】　四法なり、種は種別にて三乘の種類不同の如きをいふ。相は相貌にて、菩薩に慈悲の相、緣覺に獨靜の相、聲聞に聞法の相あるが如きなり體は三乘の體。道種智が菩薩の體、一切智が二乘の躰なる如きをいふ。性は不改の義、三乘の智體互に改轉せざるをいふ。

【出家】　五欲の境に惑溺せる家を捨てて沙門となること。出家せる人を指してもいふ。

【宿世】　前世に同じ。過去宿業をつみ重ねたる世。

【須曼那華】　須曼那樹の花黃色にして薰るといふ。

【授記】　記莂を授くること。即ち佛が修行者の將來の得果を分別し豫言すること。

【須彌山】　須彌樓、蘇迷盧、また略して迷盧ともいふ。妙高山と譯す。一世界の中央にあり。山海周圍に繞り、山高水面より八萬由旬、縱廣亦之に同じ。日月之を廻り、六道、四生、廿五有界みな之に位せり。山腹に須彌海あり。四圍の七山七海と合して九山八海の稱あり。

【衆生】　有情ともいふ。一切の生類なり。みな衆多の生死を享くる身なるが故に衆生といふ。

【衆生濁】　五濁の一。末世に及びて衆生の惡逆熾になりて修善の志なきに至るをいふ。

【衆生を成就す】　信解品による。衆生を敎化して成佛得道せしむること。

【四事】　分別品に出づ。衣服、飮食臥具、湯藥の四をいふ。

【師子吼】　師子の如く吼ふ。佛の音敎に喩ふ。

【四生】　胎、卵、濕、化の四生物をいふ。各項を見よ。

【四衆】　四部衆に同じ。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四なり又法華文句には發起衆、當座衆、影向衆、結緣衆の四衆を出す。

【師子奮迅之力】　涌出品に出づ。佛の現在益物の力。師子の先づ伏して復起くるを奮迅と名く。佛の力を師子の奮迅に喩ふ。

【師子座】　佛の座牀。轉じて高僧の座、尊貴の座をもいふ。

【師子牀】　師子座に同じ。その項を見よ。

【慈、悲、喜、捨】　之を四無量心といふ。廣大なる利他の同情心なり。

【四攝法】　布施、愛語、利行、同事の稱。これ菩薩が衆生を度脫せしむるにつき、常に用ひ衆生を攝招する四法なるが故なり。

【新發意の菩薩】　二菩薩の一。新に道心を發起せる菩薩をいふ。舊住の菩薩に對す。

【神變】　不可思議なるはたらき。

【神通】　神變不可思議の力能をいふ。通力に同じ。之に五神通、六神通の名あり。

【眞觀】　普門品に出づ。眞諦の理を觀ずること。

【盡苦の道】　方便品に出づ。生死の苦果を滅盡する道をいふ。

【信解】　敎を信じ了解すること。

【盡滅】　譬喩品に出づ。諸の煩惱を盡し滅すること。

ゑ

【慧日】　佛智を日光に喩へていふ。

【慧日大聖尊】　佛の尊稱なり。佛慧よく濁世の盲冥を破するが故に日に喩ふ。

【廻向】　廻轉趣向の義にて自ら善根を修したるを、衆生に與へて利益せしむること。又所修の善根を自らの成佛のためにさしむけること。之に衆生廻向、菩提廻向、實際回向の三あり。

【慧眼】　智慧のこと。眼は光なりものを照すの明なれば慧に喩ふ又、五眼の一。この時は諸法の空理を

知るの智慧のことなり。

【會座】說法の座、聽衆の多く集會するところなるが故に名く。

【慧命須菩提】信解品に出づ。佛般若時に於て須菩薩に命じて般若經を說かしむ。彼れ解空第一と稱せられ、般若皆空の慧に通達せるを以て世尊彼れに命ず。即ち慧人なるが故に慧命須菩提といふ。

ひ

【非人】人に非るもの。天、龍以下八部衆中の鬼畜の類を指す。

【非菩薩】安樂行品に見ゆ。三界六道の凡夫にて未だ小乘の心をも發さゞるものをいふ。

【偏に右の肩を袒ぐ】片袖を脫いで右肩を露はすこと。自ら進みてその使役に服し勞に從はんとの意を表するものにして、印度に於ける敬禮の一種なり。

【毗梨耶波羅蜜】精進到彼岸と譯す。六度の一。專精に佛道に勵み進むこと。菩薩以て彼岸に至る。

【畢陵伽婆蹉】釋尊の弟子、本經の聽衆なり。

【彼岸】生死の海を渡りて到る彼の岸の意にて涅槃のこと、菩提のことなり。又、到彼岸の略にて波羅密等の譯、涅槃に到ることの稱にも用ゐらる。

【毗陀羅】鬼神の名。屍鬼と譯す。

【毘藍婆】離縛と譯す。十羅刹女の一。

【比丘】乞士、勤事男等と譯す。出家して戒行具足せる男子、僧侶のこと。

【比丘尼】乞士女、勤事女と譯す。出家して戒行具足せる女子、尼のことなり。

【悲觀、慈觀】普門品による。悲觀は衆生を觀じて苦惱を拔くをいひ、慈觀は衆生を觀じて安樂を與ふるをいふ。

【平等大慧】佛の智慧なり。平等に二あり、一には法平等、即ち中道實相の理をいふ。二には衆生平等即ち一切衆生同じく佛慧を得るをいふ。

【白衣】白き衣。俗人の稱。僧の黑衣なるに對す。

【白毫相】無二相の一。佛の眉間に白玉の毫あり。清淨柔輭にして右に旋轉して光明を放つ。

【白象王】普賢菩薩の乘り給へる六

牙ある白色の象をいふ。六牙は六度を表し、白色は中道の無漏清淨なるを表す。

【百福莊嚴】三十二相のことなり。この一々の相は過去世に百種の福業を修したるに由りて感ずるところなればなり。

【辟支拂】緣覺に同じ。その項を見よ。

【百千萬億旋陀羅尼】勸發品に出づ。假諦の聖智をいふ。假諦は空より旋して百千萬億の法に通達するなり。

【毗薩質多羅】四阿脩羅王の一。本經の聽衆なり。

【毗舍闍鬼】啖精鬼と譯す。人の精氣を食ふ鬼。

【毗沙門天王】多聞、又は普門と譯す。四天王の一にして須彌山の半腹、第四層の水精埵に住し無量の夜叉を率ゐて北州を守る故に北方天ともいふ。又常に佛の道場を守りて說法を聞く故に多聞天ともいふ。

【頻婆果】頻婆樹の果實。その色眞紅にして潤澤あり。

も

【沐浴】頭を洗ふを沐といひ、身體を洗ふを浴といふ。身心を洗ひ淨むこと。

【目連】佛十大弟子の一、神通第一と稱せらる。摩訶目犍連に同じ。その項を見よ。

【若は有、若は無】方便品に出づ有の見と無の見となり。一は常見、他は斷見なり。常見は世界及び我の常住實體を執し、斷見は我及び世界の體實在せずと說く。共に外道の偏見なり。

【聞持陀羅尼】三陀羅尼の一。一切の音聲、言語を悉く憶持して忘るゝことなき功德をいふ。陀羅尼とは總持の義にて聖智の異稱なり。

【文殊師利】又は曼殊室利、滿殊尸利。略して文殊といふ。妙吉祥、妙德、妙首と譯す。普賢と一對の菩薩にして釋尊の左側にありて法界の智德を司る。過去無量阿僧祇劫に龍種上尊王佛といひ未來に成佛して普現如來といふと。法華經に於ては序品以下普賢、彌勒、藥王等と共に重要の位置を占むる聽衆の一人なり。

せ

【誓願】　菩薩が修行の目的を願ひ定めて成就せんと誓ふこと。總じて四弘誓願あり。別しては各々別願あり。彌陀の四十八願、藥師の十二願等の如し。

【世雄】　佛の異名。佛は世の猛雄者にて衆魔を制服するが故に名く。

【世界】　世は隔歴の義、界は種族の義、自他互に異り、種族各別なるをいふ。また世は遷流の義界は方位の義にて、過現未の三世に遷流して止まず、而も各々定位ありて混亂せざる法をいふ。

【世尊】　薄伽梵の譯。佛十號の一佛はよく世間を利し、世に尊重せらるゝが故にこの名あり。特に釋尊の敬稱として用ゐらる。

【刹】　田、土、國と譯す。國土のことなり。

【刹那】　壯士一彈指に六十四刹那ありといふ。時間の極少をあらはす單位なり。

【刹利】　利帝利の略印度四性の一婆羅門の次に位して、王、武士の種族なり。

【小法】　淺近なる法門。小乘敎のこと。

【小王】　人中の王をいふ。天中の王の大なるに比していふ。

【小劫】　中劫、大劫に比していふ、劫を見よ。

【小乘】　小なる敎乘、大乘に對す聲聞、緣覺等の小人が阿羅漢の小果を得るの法。たゞ自利ありて利他なく、小苦を滅して小利益

【小千界】　小千世界の略。日月、須彌山、四天下、四王天、三十三天夜摩天、兜率天、樂變化天、他化自在天、梵世天をすべて一世界とす。この世界を千個合したるを小千世界といふ。

【世間】　よのなか。世は遷流、間は間差の義。三世の時間に遷され、而も相集りて空間的に差別間隔あるが故に名く。

【世間解】　梵名、路伽憊。佛十號の一。佛はよく世間の事理を了解せるを以て名づく。

【禪波羅密】　具には禪那波羅密といふ。靜慮到彼岸と譯す。六度の一靜慮は禪定に同じく心を一境に注ぎ、一事に精神を沒頭せしめ、三昧に入るをいふなり、これ菩薩到彼岸行の一たり。

【仙人】　婆羅門敎等の修行者にしてその道に通達せるものゝ稱なり。

【善本】　勝果を得べき本となる善業をいふ。

【禪定】　禪は禪那の略、定と譯す。思を靜め心を明らかにして眞理を觀する心態をいふ。

【善知識】　正法を說きて人を善道に導く導師。

【羼提波羅密】　忍辱到彼岸と譯す、忍辱を見よ。

【栴陀羅】　暴惡、屠者、殺者と譯す印度四性中の最下等級の首陀なり。漁獵、守獄、屠殺等の賤業に從事す。

【旋陀羅尼】　旋轉分別して塵沙の惑を破り、恒沙の佛德を煩はす聖智なり。

【栴檀】　香木の名。赤、白、紫の諸種あり。能く病を治するが故に與藥ともいふ。

【善男子、善女人】　宿世に善根をつみし男女。宿善開發して佛法を聞信するを得る人、淨信ある男女。

【千の國土】　化城喩品に出づ。千の佛國即ち千の三千大千世界をいふ。一佛國は一の三千大千世界なり。

【瞻蔔】　旃簸迦ともいふ。香花樹と譯す。花細く香高し。その香風に順うて遠く至るといふ。

【善根】　善果を得べき善因。善行の功德。

【禪悅食】　二食の一。禪定を以て法身を資養するをいふ。

す

【隨喜】　他人の善事を我が善事の如く喜ぶこと。他人の得果を我が得果の如く喜ぶこと。勝法を聞きてうれしみよろこぶこと。

【水沫、泡、焰】　隨喜功德品に見ゆ水沫と泡と陽焰となり。常に果敢なきものゝ喩に擧ぐ。

【隨眠】　根本煩惱のこと。この煩惱は常に衆生に隨逐して心を惛迷ならしめ(隨)、而もその用微細にして知れ難き(眠)を以て名く。

字　解　終

昭和四年二月二十日印刷
昭和四年二月二十五日發行

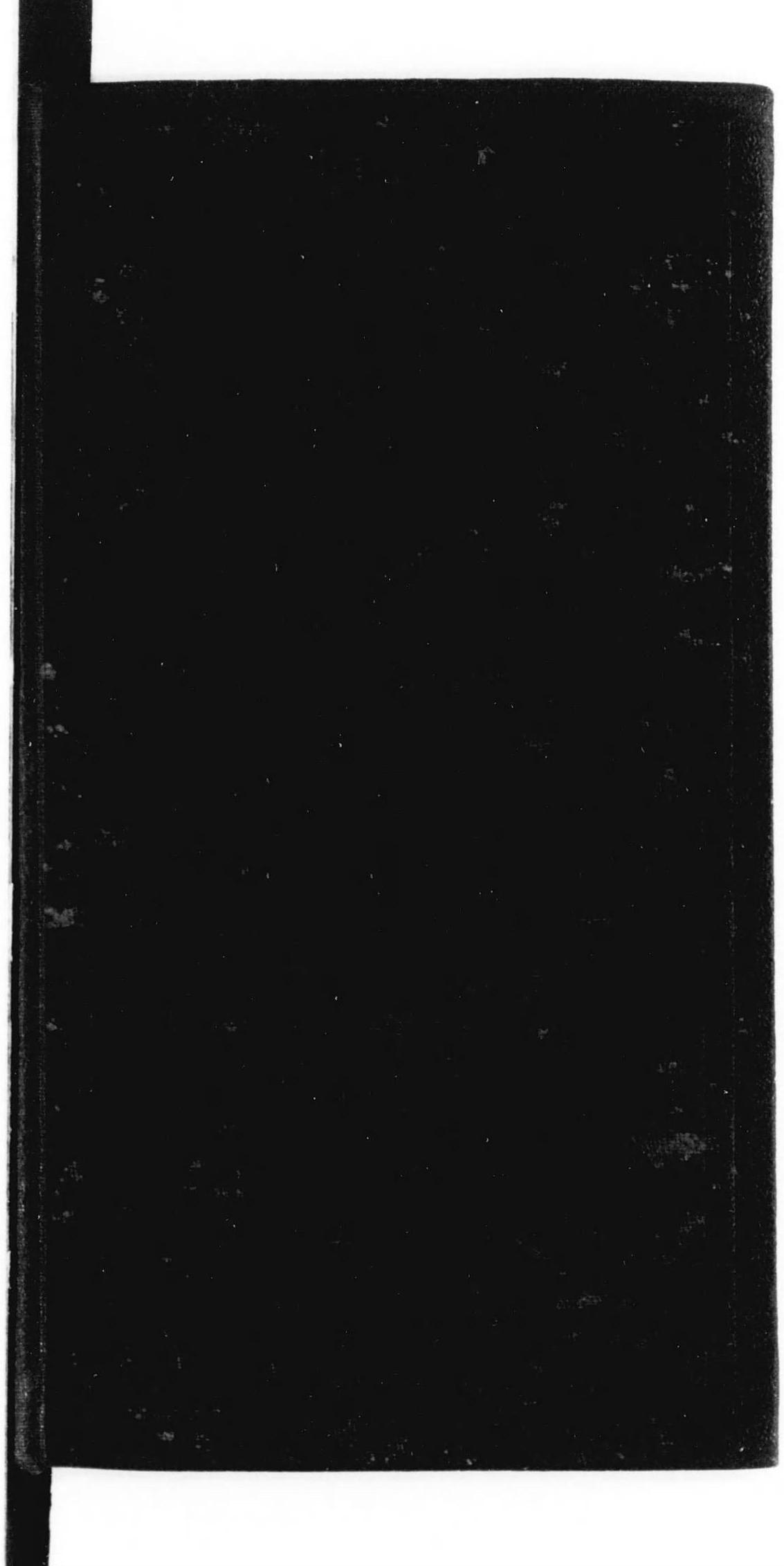
定價　上製　金壹圓
　　　特製　金壹圓五拾錢

不許複製

編輯者　秋田市楢山廣小路三番地　法華經普及會

發行兼印刷者　秋田市楢山廣小路三番地　柳原庭之助

印刷所　秋田市楢山廣小路三番地　はかりや印刷所

發行所　秋田市楢山廣小路三番地　はかりや印刷所出版部
電話　二〇九番　五六九番
振替口座　東京二八三六二番

終